

愛媛の道徳教育

第50集



2026.3

愛媛県教育研究協議会 道徳委員会

目 次

「愛媛の道德教育」第 50 集の発刊にあたって	1
I 道德委員会研究部の提案	
令和 7 年度研究の基本構想	2
小学校の実践事例	6
中学校の実践事例	8
II 「第28 回愛教研小・中学校道德教育研究大会」記録	
研究大会要項	10
第1分科会 道德科講座 道德科の基礎・基本	11
第2分科会 小学校部 提案・演習	13
第3分科会 中学校部 授業提案	15
特別講演記録(教科調査官 大平 剛生 先生)	17
III 研究大会報告	
第61回全国小学校道德教育研究大会	23
第59回全国中学校道德教育研究大会	24
IV 支部だより	
四国中央	25
新居浜	27
松山	29
大洲	31
喜多	33
附属	35
おわりに	37
役員一覧	38

「愛媛の道徳教育」第50集の発刊にあたって

愛媛県教育研究協議会道徳委員会

委員長 山岡 健二(松山市立垣生小学校校長)

今回の発刊で「愛媛の道徳教育」は、記念すべき第50集となります。これまで、長きに渡り、本県において道徳教育の充実・発展を目指し、歩みを続けてこられた先人の取組に対して、心より敬意を表したいと思います。先人たちの積み上げてきた実践を踏まえて、愛媛の子どもたちのために新たな道徳教育の学びを創造していくのが、私たちの使命であると痛感しています。

11月に開催された「第61回全国小学校道徳教育研究大会広島大会」に参加させていただきました。公開授業では6年生の1学級を参観したのですが、教師の発問に対して友達の考えも踏まえ、子どもの意見が途切れることなく続く授業でした。道徳科の授業ではどうしても教師の発言が多くなる傾向があるのですが、教師の発言を極力減らして、子どもたち同士で主体的に学びを進める授業であると感じました。6年生の他の学級の参観者も、他学年の参観者も同じような感想を述べていました。全校体制で共通理解を図りながら道徳教育を推進していることがよく分かりました。「学びがいのある道徳科の授業」を目指して、明確な指導観を持ち授業を行うこと、教材分析をして発問を深く検討することなどに取り組んできましたが、支持的風土の中、全ての教育活動において、相手の考えをしっかりと受け止め、自分の考えが表現できる子どもを育てていくことが基盤となると強く感じました。道徳性が育つ、学びがいのある道徳科の授業の実現を目指し、今後も取り組んでいきたいと思います。

本年度も本委員会の中核的な行事である「愛教研小・中学校道徳教育研究大会」を8月5日に松前総合文化センターにて開催することができました。本研究大会は、本県の道徳教育の推進と道徳科の授業力向上を目指して、実施してまいりました。本年度の研究大会では、授業動画や具体的な授業内容を取り入れた実践的な三つの課題別分科会と今年度から文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官になられた本県ともゆかりのある大平剛生様のご講演を行うことができました。本年度も県内各地から200名を超える方にご参加いただき、授業力向上につながる研修が実施できたことを大変うれしく思います。本研究大会の内容については、本冊子に掲載しておりますので、ぜひご確認ください。

結びになりますが、本冊子を発行するに当たり、研究大会についてまとめていただいた皆様、各支部の取組についてご報告いただいた支部委員長様、編集作業にご尽力いただいた道徳委員会の皆様に心から感謝を申し上げます。本冊子の発刊がこれからの皆様の道徳科の授業改善の一助になれば大変ありがたく思います。

I 道徳委員会研究部の提案

令和7年度 研究の基本構想 — 学びがいのある授業の充実のために —

愛媛県教育研究協議会道徳委員会研究部

1 はじめに

特別の教科としての道徳科は、小学校で 2018 年度、中学校で 2019 年度から全面実施され、教科書や評価の工夫を通じて「考え、議論する道徳」の授業づくりが進められている。愛媛県教育研究協議会道徳委員会では、特色ある道徳教育推進事業における研究推進校での取組等、県内の小・中学校における研究推進状況を踏まえ、「学びがいのある授業」を充実させることを通じて、子供の道徳性が育つことを目指し、研究に取り組んでいる。

私たちの願いは、各校が目指す道徳教育の目標の達成に向けて、学校それぞれの実態を踏まえ、道徳教育や道徳科を充実させることにある。

私たちが提案する本研究が、各校が目指す道徳教育の目標達成のための一助となればと考える。

2 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

— 学びがいのある道徳科の授業を要として —

3 主題設定の理由

本研究の主題設定の理由を現代社会の変容と子供たちを取り巻く情勢、道徳教育の本質と道徳科の役割、学びがいのある授業の構造の三つの側面から見ていく。

(1) 現代社会の変容と子供を取り巻く情勢

今日、我々を取り巻く社会情勢は、グローバル化の急速な進展や少子高齢化の加速、さらには高度情報化によるコミュニケーション形態の変化など、予測困難な「VUCA(ブカ)」の時代へと突入している。多様な価値観や異文化が複雑かつ密接に関係し合う現代社会において、子供が直面する課題は、単一の正解で解決できるほど単純ではない。このような先行きの不透明な状況下で、次代を担う子供に強く求められるのは、異なる背景を持つ他者と協働しながら、粘り強く最適解を模索し、自らより良く解決していく力である。また、情報をうのみにするのではなく、物事を多面的・多角的に捉え、自らの責任で判断を下す力が、かつてないほど重要視されている。

(2) 道徳教育の本質と道徳科の役割

学習指導要領において、道徳科の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」と示されている。この一文には、個々の道徳的価値の理解に留まらず、人間としていかに生きるべきかという根源的な問いに対する「自己の在り方」の形成を促すという、道徳教育の本質が凝縮されている。道徳科を学校における教育活動の「要」として機能させ、真に実効性のあるものとするためには、これまでの「教え込む道徳」から脱却し、道徳科の特質を最大限に踏まえた授業実践への転換が不可欠である。では、子供の内面に深く響き、生涯を通じて自己を律し、高めていく力へとつながる授業とは、一体どのような姿であろうか。

(3) 「学びがいのある授業」の構造

本研究において、我々は子供が主体的に参与し、深い自己内省を伴う「学びがいのある授業」の創造を目指している。ここで定義する「学びがいの」とは、単なる情動的な興味関心ではなく、次の六つの視点が具現化された授業を指す。

- ・ 真剣に思考し続ける時間：真剣に考えることができた時間
教材の葛藤場面を自分事として捉え、安易な解決に逃げずに考え抜く姿。
- ・ 素直で誠実な表出の時間：自分の思いや考えが素直に誠実に発言できた時間
心理的安全性が保障された集団の中で、綺麗事ではない「本音」を言葉にする姿。
- ・ 相互承認による自己肯定の時間：自分の思いや考えがみんなに認められた時間
自分の考えが他者に求められ、集団の一員としての存在意義を実感する姿
- ・ 未知なる価値観とのかいこうの時間：自分が持っていない価値観に出会えた時間
対話を通して、自分とは異なる視点や感性に触れ、認識が更新される驚きを伴う姿。
- ・ 道徳的価値の再構築の時間：道徳的価値の大切さを再認識、再確認できた時間
知識としての規範を、実感を伴う「生きた価値」として再確認・再認識する姿。
- ・ 主体的納得による規範形成の時間：守るべき道徳を自らが納得してつくることができた時間
外部から与えられた規律を、自らの意志で「守るべきもの」として納得し、内面化する姿。

「学びがいのある授業」を継続的に経験することで、子供は自分の内に潜在する「よりよく生きようとする力」に自覚的になる。それは、自分自身の在りたい姿や人間としての生き方について自分の言葉で語り始める契機となることが期待される。道徳的な問いに正解はない。対話と思索の果てにたどり着く「その時の最善解」や、自身が納得できる「納得解」を得る経験は、子供にとって揺るぎない自信となる。このような学びの積み重ねこそが、「道徳の時間は自分を深く見つめられる時間だ」「次も仲間と考えを深めたい」という次への意欲を生み、豊かな道徳性の基盤を形成するものと確信し、本主題を設定した。

4 研究の視点

研究を進めていく上で次の3点に着目して研究を推進していく。

(1) 道徳教育の推進と充実

道徳教育を学校全体で効果的に推進するためには、一部の教員に委ねるのではなく、組織的な指導体制を構築することが不可欠である。その際、留意すべき点として、まず、「校長の方針の下、道徳教育推進教師を中心とした各校の実態及び特色を生かした推進体制の確立」が挙げられる。この円滑な体制の下で作成された諸計画を、いかに実効性を持って運用していくかが、教育活動の質を左右する。また、重点内容項目を意識した各教科等との横断的な学びを実現すること、そして、それらを支える校内研修を充実させることも、欠かすことのできない要素である。

組織的な指導体制づくりについて、令和6年度「特色ある道徳教育推進事業」授業ブックレットより、川之江北中学校の取組を参考にしたい。同校では、研究を計画的かつ組織的に推進するために指導体制の見直しを行い、「道徳教育推進委員会」と「三つの研究部会」を立ち上げている。推進委員会で協議・検討された内容は全教職員で共通理解を図り、学級での具体的な指導へと繋がられた。また、三つの部会を学期に3回程度開催し、PDCA サイクルを大切にしながら実践研究を進めることで、組織としての研究精度を高めている。

こうした道徳教育推進教師のリーダーシップによる校内研修の充実は極めて重要である。研修の形態としては、模擬授業を通して「中心発問」や「問い返し」を子供の目線から検討する取組や、外部研修で得た知見を共有して教職員のアップデートを図る取組、さらに学年単位での協議など、多様なアプローチが考えられる。その際、学校や学年の実態に応じて「対話を促す手立てや学習形態の在り方」「多面的・多角的な思考の見取り方」「考えを深める発問の工夫」といった具体的なテーマを設定することが、研修を形骸化させない鍵となる。

一方で、多忙な学校現場において、十分な研修時間を確保することが困難な場合もある。その解決策の一つとして有効なのが、インフォーマルな研修形態である「リレー道徳」の実践である。この取組では、まず各学級の道徳科の授業日をあえてずらして設定する。最初に授業を行った教師は、終了後に板書をタブレット等で撮影し、その写真の下に「こうすればよかった」「この問い返しが有効かもしれない」といった気付きをメモ程度に書き込み、学年掲示板等に掲示する。次に授業を行う教師は、その記録を参考にしながら自らの授業案を練り直し、さらに改善点を加えて次の教師へと繋いでいく。このプロセスを繰り返すことで、授業実践が自然とブラッシュアップされていくのである。特に、最後に授業を行う教師を若手教員に設定すれば、先行した先輩教師の思考のプロセスを可視化された形で学ぶことができ、時には直接質問を投げかけることで「生きた研修」としての機能も果たす。

このように、フォーマルな研修と、日常の工夫によるインフォーマルな研修を両輪で回すことが、教員の指導力を高めることにつながると期待する。

(2) 学びがいのある道徳科の授業の充実

学びがいのある道徳科の授業を創造するにあたり、「道徳科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」「明確な指導観の確立」「多様な価値観に触れること」「自己の生き方の探究」の四つの視点を重視したい。

まず、道徳科における「個別最適な学び」とは、子供一人一人が教材を自分事として捉え、内省を深めるプロセスである。具体的には、ねらいとする道徳的価値に関わって自らの経験を想起させ、問題意識を持たせる導入や、個々の発想に合わせた学習形態の工夫、そして教師の問い返しによる思考の言語化が挙げられる。これにより、子供は自己の経験に基づいた多角的な振り返りが可能となる。

一方で「協働的な学び」は、対話を通して自他の考えを比較・共感し、思考を広げる場である。子供の実態に応じた多様な考えを提示し、デジタル機器の利活用によって瞬時に意見を共有することで、集団としての思考を深めていく。教師が子供の反応を予測して意図的なグループ構成を行い、深まりのある問い返しを行うことで、協働的な学びはより実効性を持つものとなる。

次に、こうした学びを支える「明確な指導観」と、指導と評価の一体化について考えたい。内子町立天神小学校の生命尊重を主題とした実践では、一般的なねらいをさらに焦点化し、「唯一無二の命に気付くための具体的な背景」を明確にしたねらいを設定した。このように、授業で考えさせたい価値を精査し、道徳性を構成する諸様相を明確にすることで、教師の指導意図が研ぎ澄まされ、効果的な発問へとつながった。

さらに、多様な価値観に触れさせることは、あふれる情報の中から必要なものを選び取り、自らの人生を主体的に構築する力を養うことに直結する。松前町立北伊予小学校では、全教科で展開する話し合い活動を「あいあいタイム」と命名し、低・中・高学年ごとに身に付けさせたい力を系統化した。聴くことに重点を置いた「ポイント」を提示することで、子供は他者の意見との共通点や相違点、相手の良さを積極的に見つけようとする姿へと変容した。こうした工夫は、単なる意見交流を超え、互いの価値観を吟味し合う「共に考え、語り合う場」としての道徳科を具現化している。

私たちがイメージする道徳科の授業は、多様な価値観に触れることを通して子供が自己を見つめ、自己理解を深めていく場である。自己の生き方や人間としての在り方について深い自覚が生まれる学びの場は、貴重である。じっくりと自分を振り返る中で自尊感情を高め、考えの深まりを実感する。こうした地道な学びの積み重ねこそが、道徳性を徐々に醸成していくと思われる。道徳科における話し合いは、多様な価値観に触れる場であると同時に、自己の生き方を保障する場でもある。この確信に基づき、日々の授業実践を積み重ねていくことが求められる。

(3) 開かれた道徳科・道徳教育の充実

道徳教育の実効性をより高め、子供たちの日常に根付かせたものにするためには、学校だけに閉じ

ない「開かれた道徳教育」の充実が不可欠である。学級や学年間の垣根を越えた連携はもとより、家庭や地域の人々、各分野の専門家等とのつながりを大切にする中で、共通理解と相互の連携を図ることが求められる。

その具体的な手立ての一つとして、参観日における道徳科の授業公開や、地域学校協働活動を生かした教育計画の策定が挙げられる。道徳教育の目標や意図を保護者・地域と共有することは、学校の指導方針への理解を深めるだけでなく、地域全体で子供を育てる基盤となる。また、通常の学級と特別支援学級が連携し、多様な特性を持つ仲間と共に学ぶ場を創出することは、共生社会の担い手を育む観点からも極めて重要である。

さらに、学校で行っている道徳教育の在り方や、子供の道徳的習慣の変容を、積極的に外部へ発信していく姿勢も大切にしたい。学校だよりやホームページ等を通じて、子供の良さや成長の様子を伝えるとともに、家庭での様子についても情報提供を呼びかける。こうした双方向のコミュニケーションが、保護者や地域住民の意識を高め、学校と家庭、地域が歩調を合わせた指導を可能にする。

実際の授業場面においては、地域の方をゲストティーチャーとして招へいする取組も極めて有効である。地域に生きる先達から直接語られる体験談や思いは、教材の中の出来事をより身近で切実なものへと変える力を持っている。事実、地域の方によるお話を聞く授業では、子供が真剣な眼差しで自らの思いを発表し、学んだことをワークシートに深く書き留める姿が多く見られた。

このように、多様な人々とのつながりの中で道徳教育を推進することは、子供にとって「生きる知恵」を学ぶ貴重な機会となる。学校・家庭・地域が手を取り合い、それぞれの教育機能を補完し合いながら、子供の豊かな心を育てていく体制づくりを、今後も一層推進していきたい。

5 おわりに

道徳教育の充実は、決して一朝一夕に成し遂げられるものではない。しかし、本研究において提示した「学びがいのある授業」の創造と、それを支えるための組織的な指導体制の構築、さらには学校の壁を越えた家庭・地域社会との有機的な連携を地道に積み重ねていくことこそが、子供の豊かな道徳性を育む唯一の道であると確信している。道徳科の授業において、子供たちが自らの内面と深く向き合い、仲間との誠実な対話を通して自分なりの「納得解」を見出す経験は、正解のない問いがあふれる現代社会を自立して生き抜くための、揺るぎない知恵と指針になるはずである。

各学校においては、本研究で提案した三つの視点や、県内各地の創意工夫に満ちた実践事例を一つの契機とし、それぞれの地域特性や目の前の子供たちの実態に即した、血の通った「特色ある道徳教育」を力強く展開していただきたい。教師自身が道徳教育の持つ無限の可能性を信じ、子供と共に真理を求め、人間としての在り方を問い続ける姿勢を持ち続けるとき、道徳科の時間は、単なる規範の習得や知識の伝達を超えた、自己の人生を主体的に創造するための「かけがえのない時間」へと変容していくのである。

本研究の成果が各現場の隅々にまで浸透し、子供が「今日の道徳の時間があってよかった」「また仲間と考えたい」と心から実感できる授業が、一つでも多く生まれることを願ってやまない。自分の良さに気付き、他者の痛みを理解し、よりよい社会を築こうとする道徳的実践意欲や態度は、そうした日々の質の高い学びの積み重ねの中にこそ宿るものである。それは、子供が将来、多様な人々と協働しながら幸福な人生を切り拓いていくための、強靱な根幹となるに違いない。

愛媛県教育研究協議会道徳委員会研究部としては、今後も現場の熱意ある実践に寄り添い、研究の成果を広く発信・共有していくことで、県内の教育力の向上に寄与していく所存である。本提案が、子供一人一人の内に秘められた「よりよく生きようとする力」を鮮やかに呼び覚まし、本県における道徳教育の更なる発展と深化に向けた確かな一助となることを切に願う。

児童が主体的に取り組み、考えを深める授業の展開

愛媛県教育研究協議会道徳委員会研究部

1 授業実践の基本構想

本授業では、児童の主体的な学びを促し、ねらいとする道徳的価値について、多面的・多角的に考えることができることを目的とした。

授業構想の段階では、教材「マルガレーテ・シュタイフ」を活用して「努力」をテーマに、児童が作った問いをスタートとして授業を行うことを考えた。あくまでも児童が作った問いは考えるきっかけであり、学びの出発点であると考えている。適宜問い返しをしながら、児童から多様な価値観を引き出すことを意識して、中心発問や補助発問を吟味した。

展開では、マルガレーテがどんな思いで努力を続けたのかを話し合わせる際に、黒板やホワイトボード、紙で思考ツールを活用しながら考えたり、いろいろな友達と考えを交流しながら考えたりするなど、学び方を選択させるようにする。板書に参画する際には、自分たちで考えを類型化することにも取り組ませる。このことにより、主体的な学びになり、物事を多面的・多角的に捉えられるようになることを考えた。

また、児童が自己の生き方についての考えを深められるように、まず、導入と展開後段で同じことを問い、「努力」に対する価値観の広がりや深まりに気付かせたいと考えた。そして、みんなで話し合ってきた価値観を通して今までの自分を振り返り、すてきな自分を見付けたり、これから大切にしたいことについて考えたりすることができるようにしたいと考えた。

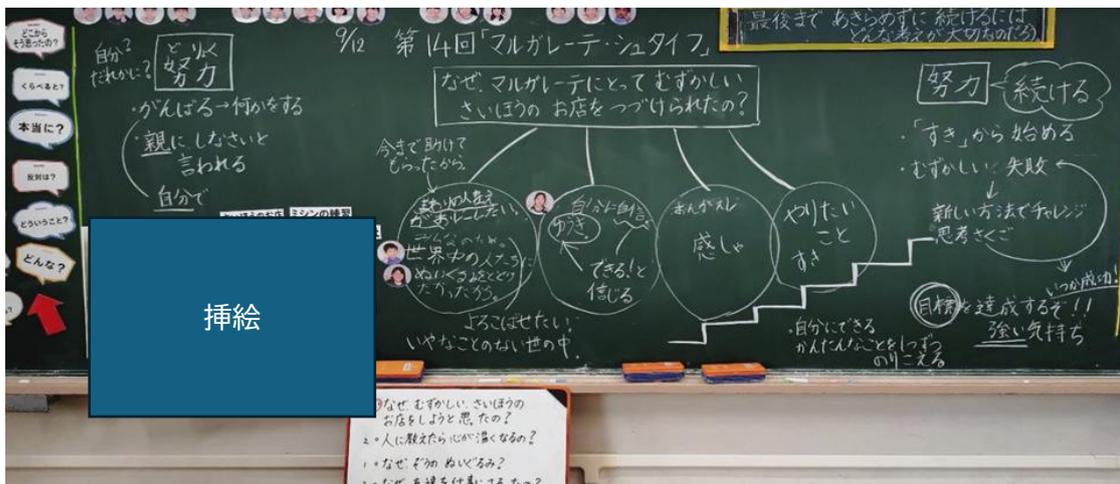
2 授業の実際

- (1) **主題名** 決めたことをやり抜く【A 希望と勇気、努力と強い意志】
- (2) **教材名** マルガレーテ・シュタイフ ー ティーペアを作った人ー(「生きる力4」日本文教出版)
- (3) **ねらい** 長い間、がんばり続けることができたマルガレーテの思いを考えるを通して、それぞれの段階における目標を持ち、その目標を達成したいという強い意志を持って努力することの大切さに気づき、自分で決めた目標に向かって粘り強く努力しようとする道徳的実践意欲を育てる。

(4) 教材内容

幼い頃に病気で両足と右手が不自由になったマルガレーテは、小学校で一生懸命に勉強をして、友達に算数の勉強を教えてあげていた。大きくなると、姉たちと裁縫の店を始めた。右手用のミシン以外なかったが、何度も練習をして、左手で上手に使えるようになった。その後、ぬいぐるみの会社を作り、小学校のときの友達に声を掛けて一緒に働き、今でも世界中の人に愛されるティペアを作った。

(5) 授業の実際



3 指導の詳細

学習活動	発問(○)と実際の反応(・)	指導上の留意点(○)
<p>1 「努力」とはどのようなことか考えたり、経験を振り返ったりする。</p> <p>2 教材をもとに考え、話し合う。</p> <p>3 自己を振り返る。</p>	<p>○ 「努力」とは、どういうことだと思いますか。また、努力したことはありますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分でがんばること。 ・努力したことはあるけど、あきらめた。 <p>○ みんなで考えていきたいと思う問いを作り、みんなで考えていきましょう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>なぜ、マルガレーテにとって難しい裁縫の店を続けられたのか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・世界中の人にぬいぐるみを届けたいという思いがあって頑張ることができた。 ・難しいけど、勇気を出してやってみた。 ・自分ではできると自信を持って努力した。 ・今まで助けてくれた人に恩返しをしたかった。 ・自分の好きなことだから続けられた。 <p>○ 改めて、「努力」とはどういうことだと思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の「好き」という気持ちから始めると続けられる。 ・難しく失敗しても、新しい方法でチャレンジして、それを繰り返して、成功するまで試行錯誤しながら続けることが大切。 ・自分にできることを、階段みたいに一つずつ乗り越えることが大切。 ・「目標を達成するぞ!」という強い気持ちを持つことが大切。 <p>○ 今までの自分を振り返り、「こんな気持ちで努力を続けたすてきな自分がいたな」ということや、「こんな気持ちが大切だな」「こんなことを大切にしたいな」と思うことはありますか。</p>	<p>○ やり遂げられなかった経験も聞くことで、問題意識を持たせる。</p> <p>○ 問いは、一人で考えた後、少人数で話し合い、全体で決めるようにする。</p> <p>○ 黒板やホワイトボード、紙で思考ツールを使って考えたり、対話をしたりするなど、学び方を選ばせる。</p> <p>○ 「難しいと思うのなら、すぐにできる簡単なことに取り組んだ方がよいのではないか」など、適宜問い返しをしながら、ねらいに迫れるようにする。</p> <p>○ 導入と同じことを問い、「努力」に対する価値観の広がりや深まりに気付かせる。</p> <p>○ 今までの自分と努力との関わりを想起させる。</p> <p>○ 努力を続けられた児童に思いを語らせ、みんなで称え合う。</p>

4 実践を振り返って

みんなで決めた問いは、導入で、「努力したことはあるが続けられず、あきらめてしまった」という経験をした児童が多かったことから、ほぼ全員が選んだと考えられる。このことから、問い作りは、自分自身の価値観や生活との関わりを意識するきっかけになると考える。また、児童が板書に参画することにより、思考の過程が「見える化」され、考えの違いを理解し、自分の考えを整理したり、多面的・多角的に考えたりすることにつながった。

自己を振り返る場面において、すてきな自分を見付けたり、「～していこう」という思いを持ったりしている児童が多かった(資料1)。今後は、「自分自身への問い」も大切に授業を目指したい。

ほくは今日、最後まであきらめずに続けるには、好きなものをはかれば、たらいいいことが分かりました。自分の好きなことにチャレンジして失敗しても、また何度もチャレンジすること大切だなと思いました。失敗は成功の母」というので、ぼくも失敗したら、チャレンジ、また失敗したらチャレンジとくり返して、最後まであきらめない心を大切にしたいです。ぼくは工作がすてきで失敗して作り直しています。力をしよう来、みんなの役に立てるものを作りたいです。

資料1 児童の振り返りカード

学びがいのある道德科の授業の充実を目指して ～道德教育推進教師としての取組～

愛媛県教育研究協議会道德委員会研究部

I 学びがいのある道德科の授業の充実を図る手立て

よりよく生きるための基盤となる道德性を養うために、道德科の授業を道德教育の要として実効性のあるものとするためには、道德科の特質を踏まえた授業を年間35時間積み重ねていくことが大切である。

愛教研道德委員会では、「学びがいのある授業」の充実を目指している。そこで、勤務校では生徒と本音で向き合い、一緒に深く考えていくことで、教師にとっても生徒にとっても楽しい授業の実現に努めている。しかし、今年度は、教科書の改訂に伴い、教員は各教科の教材研究に追われ、加えて道德科の教科書も年度当初の教材に大幅な変更があった。初めての教材となると、負担感を感じる教員もいるのではないかと考えた。そこで、道德教育推進教師として、4月当初から各学年で道德開きができるように、各学年道德担当任せにせず、全学年の道德開きから6月分までの授業の略案から板書計画までを支援した。さらに、5月には研修職員会を持ち、「道德科の基礎・基本」と題して校内研修の充実を図った。

(I) 誰もができる道德科の授業

ア 道德科の授業で大切なこと

道德科の授業で大切なことについて、共通理解を図った。具体的には、①教材研究を通して、教師が発達段階に応じたねらいとする道德的諸価値の理解(価値理解、人間理解、他者理解、自己理解)をして、授業に臨むこと、②中心発問で何について考えさせ、何に気付かせたいのかを明確に持ち、考え、議論する(話し合い)活動やICT機器の活用、役割演技など、どんな手段を使おうとも、道德科の授業の目的を忘れないことである。そして、物事を一面的に捉えるのではなく、様々な視点から多面的・多角的に考え、主体的に学習に取り組むことができるようにした。振り返りでは、自分自身の体験やそれに伴う関わりを確かに想起して、自己の生き方について考えを深めさせるようにした。

イ 教材分析

上述の授業とするには、教材分析をし、道德的問題としての「起承転結」を考え、生徒の実態に応じたねらいを熟慮することが必要となる。読み物教材には、次の4つがある。①実践教材、②知見教材、③葛藤教材、④感動教材である。教材について大まかに捉えた後、道德的問題として

【一般的な道德教材を分析するときのポイント】

- ①生き方が道德的に変化したのは誰(何)か。
- ②主人公の言動や心情はどこで変化したか。
- ③主人公が変化したきっかけは何か。
- ④主人公は、自覚した結果、どのような行為をしたか。

の「起承転結」を考える(右図参照)。そして、道德性を構成する諸様相のうち、「道德的判断力」「道德的心情」「道德的实践意欲と態度」のどのねらいが適しているのか、熟慮することとした。

ウ 発問づくり

東京学芸大学特任教授の永田繁雄氏は、次の4類型(①共感的発問、②分析的発問、③投影的発問、④批判的発問)を挙げている。特に、中心発問は、主人公の道德的決断や変化に注目し、主人公が道德的価値を自覚している部分から設定するとよい。中心発問を考えるヒントとして、「道德的に変容があった場所」から、「心が見える表現」を見付け、形容詞や副詞を捉えると分かりやすい。校内研修でこれらについて取り上げ、発問づくりの参考とした。

エ 書く活動と板書

ワークシートや協働学習支援ツールなどICTを活用しての書く活動は、中心発問と振り返りだけにする。教科書会社による道德ノートやワークシートは発問が多いのでそのまま使用せず、学校としての基本型を示した。他にも年間35回の実施を意識するために、「第〇回道德」とタイトルに入れた。

板書は教科書の文字方向で板書する。道德科の教科書は右から左へ進展するため、板書も縦書きで右から左に時系列で書く方が、思考上の無理がない。ただし、主人公の成長を見える成長曲線

型や、意見の対立が分かる対立型など、構造的なねらいがある場合は、横書きが効果的である。

(2) ローテーション道德の実施

これまで1学期は学級担任が道德科の授業の基礎固めをし、初任者や教育実習生には道德教育推進教師が授業を複数回公開して、誰もが道德科の授業をできるようにしてきた。そのうえで、2学期から学年主任や副担任も加わってローテーション道德を実施していたが、9月は行事が多く、計画通りにいかない場合が多かった。そこで、今年度は、1学期の期末テストの期間の前半に道德部会を開き、7月から行うローテーション道德の教材と担当者を決めた。そうすることで、教材研究に早く取り掛かり、夏休み中の自己研修で指導案の作成や手直しをしている姿が見られた。実際、2学期中に計画的にローテーション道德を終えることができ、職員室で教員が道德科の授業について話す機会も多く見られた。生徒たちも、次の授業は誰が、何の教材とするのか、楽しみにしていた。

(3) リレー道德の実施

3学期はリレー道德を実施している。今年度は、ローテーション道德同様、2学期の期末テストの期間の前半に道德部会を開き、12月から行うリレー道德の教材と最初の担当者を決めた。京都産業大学教授の柴原弘志氏が提唱しているリレー道德は、なかなか研修の時間を設定しにくい中学校現場において、大変取り組みやすい。①最初の教員は貼り絵などの準備をして授業を行い、授業後に板書を撮影し、板書写真の下に改善点や生徒の反応などについてメモを書く。②次に授業をする教員はそのメモや板書写真を見て授業に臨み、改善してやってみてどうだったかを書き込む。③この流れを複数回繰り返すことで、複数の教員で教材をよりよいものにしていくことができる。3学期の教材をリレー道德で行うことで、道德教育推進教師や学年道德担当だけでなく、みんなが関わって無理なく教材研究ができ、それが学校としての人的、物的財産になっている。

2 多様な教材の開発と創意工夫ある指導

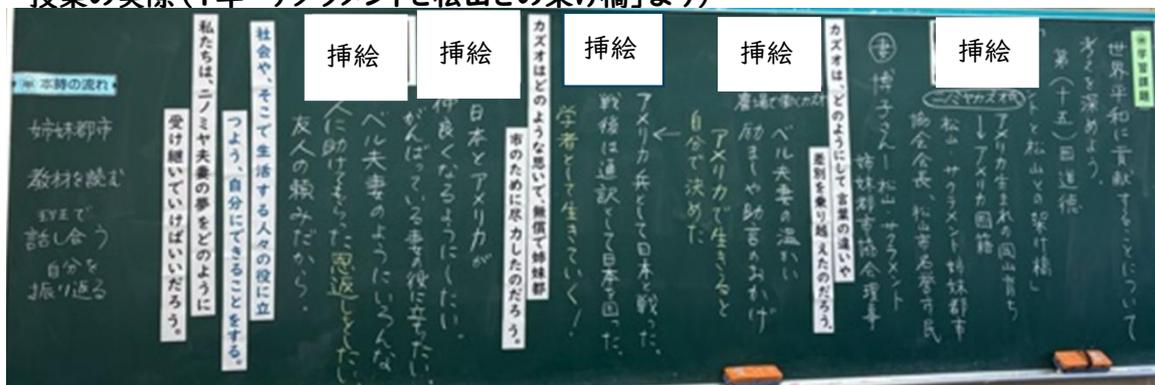
(1) 「『愛』ある愛媛の道德」の活用

主たる教材として教科書を使用するのはもちろんであるが、道德教育の特性に鑑みれば、各地域の特色を生かした教材を活用することも重要である。愛媛県には、平成23年に愛媛県教育委員会が発刊した「『愛』ある愛媛の道德」があり、現在は、学校用として生徒数分を各学年分室に保管し、全学年、年間指導計画に取り入れて活用している。そうすることで、教師にとっても、生徒にとっても、「ふるさと愛媛」のよさを再発見し、自分事として地域の課題について考えるよい機会となっている。

(2) 本校での使用教材

- ア 1年「母校に花を咲かせたい」(5月)、「 sacramentと松山との架け橋」(9~11月)
- イ 2年「きらめきは自分の中に」(5月)、「和釘に込めた千年のいのち」(2月)
- ウ 3年「最後の体育祭」(9月)、「平田を救った宮内伊予柑」(9~11月)

(3) 授業の実際(1年「 sacramentと松山との架け橋」より)



(4) ICTの活用

板書だけでなく、協働学習支援ツールで大型テレビの有効活用を図るとともに、教材に応じた思考ツールなども活用して、生徒が自分自身との関わりの中で考えを深められるように工夫した。

Ⅱ 「第28回 愛教研小・中学校道德教育研究大会」記録

<研究大会要項>

- 1 主催 愛媛県教育研究協議会
- 2 後援 愛媛県市町教育委員会連合会
松前町教育委員会
- 3 日時 令和7年8月5日(火) 10:00~15:00
- 4 場所 松前総合文化センター
- 5 研究主題 よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究
－ 学びがいのある道德科の授業を要として －
- 6 日程

9:30 10:00 10:35 10:50 12:10 13:10 14:50 15:00

受付	開会行事 基調提案	移動	課題別分科会	休憩	特別講演	閉会行事
----	--------------	----	--------	----	------	------

7 特別講演

演題:「考え、議論する『特別の教科 道德』の一層の充実に向けて」

講師 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官

大平 剛生 先生

8 課題別分科会

分科会 【対象】	内容	提案者	コーディネーター
第1分科会 【小学校】	特色ある道德教育推進 事業推進校の取組を 通して	西条市立壬生川小学校 教諭 渡邊 敬祐 教諭 松岡 泰成	松山市立垣生小学校 校長 山岡 健二
第2分科会 【中学校】	特色ある道德教育推進 事業推進校の取組を 通して	東温市立重信中学校 教諭 吉田 郷	松山市立勝山中学校 校長 森脇 和夫
第3分科会 【小・中】	シンポジウム	松山市立生石小・垣生小学校 非常勤講師 齊藤 照夫 日本道德教育学会四国支部 副支部長 坂井 親治	伊予市立由並小学校 校長 友澤 美和

【課題別分科会の概要】

第1分科会【小学校】【中学校】

焦点授業の動画を視聴し、授業に至るまでの経緯や授業に込められた思い・工夫について授業関係者が語った。視聴後、学校全体で取り組むローテーションTT道德や、深い学びにつながる中心発問づくりについて、共に考え、授業力の向上を図った。

第2分科会【小学校】

焦点授業の動画を視聴し、授業に至るまでの経緯や授業に込められた思い・工夫について授業関係者が語った。視聴後、授業者の意図が明確な発問構成や、道德科の授業における指導の工夫について同じ教材を通して、共に考え、研修を深めた。

第3分科会【中学校】

子供が学習問題(発問)を考える、子供が主体的に学習に取り組む道德科の授業、子供が生活体験等も生かして自分との関わりを深く考える道德科の授業について、シンポジストの提案を基に、参加者との意見交換を交えて議論を深めた。その際、子供と教師がともに授業を創る視点を大切にした。

第1分科会 特色ある道徳教育推進事業推進校の取組を通して【小学校】

提案者 西条市立壬生川小学校 教諭 渡邊 敬祐、松岡 泰成

1 研修の主な内容

令和6年度に西条市立壬生川小学校で開催された「愛媛県特色ある道徳教育推進事業推進校研究発表会」での第5学年の焦点授業の動画を視聴しながら研修を進めた。コーディネーターが授業展開や発問の意図等について共通理解を図りたいと思ったことを授業関係者に聞きながら、本授業についての理解を深めていった。焦点授業に至るまでの経緯や授業に込められた思いや工夫、学校全体で取り組んでいるローテーションTT道徳や発問づくりについて知ることで、参加者の授業力向上につなげた。

2 授業の内容

(1) 主題名

あなたのことを考えて【B 親切、思いやり】

(2) 教材名

「最後のおくりもの」（「新しい道徳5」東京書籍）

(3) 本時のねらい

二人の行為を支える思いについて考え、話し合うことを通して、相手の立場に立って思いやりの気持ちを持ち、相手のことを大切にしようとする道徳的心情を育てる。

3 研修の様子

(1) コーディネーターとの質疑応答

ア 導入部分での発問について

児童の発達段階に即したねらいの設定と道徳的価値の自覚に迫る発問の工夫に配慮した。「学習指導要領解説」を中心として、「小学校 中学校 納得と発見のある道徳科」（島 恒生著：日本文教出版）も参考文献とした。本時の内容項目は「親切、思いやり」で、導入部分で、「思いやりと聞いて、どんなことが思い浮かびますか。」という発問をし、児童から意見を聞いた後、「思いやりは、自分を犠牲にしてするものでしょうか。」というテーマ（ねらい）を提示した。このテーマは、思いやりについてさらに深く考えさせるために出したものである。授業構想段階の予想通り、事前アンケートでも、児童から「犠牲」という言葉が出てきていた。

イ 選択させる発問について

『この話は、「よい話」「悪い話」「どちらとも言えず何か引っかかるところがある」のどれかな』という発問のねらいは、教材のポイントとなる場面で自分の立場を明確にして、考えさせたいことを焦点化したいという意図からである。

ウ T2の役割について

全校でローテーション TT 道徳に取り組んでいる。この授業の中では、T2 が主に板書をしていた。一人の授業者だけでは、児童の意見を聞きながら板書もしなければならないため、流れが停滞することが多い。しかし、T2 が板書をしてくれることで、T1 は児童の方を向いて一人一人の意見を最後までしっかりと聞くことができたり、問い返しをしたりすることができる。途中、T2も問いを投げ掛けることがあったが、T2の役割は板書だけでなく、発問をしたり机間巡視をしたり、取り上げる意見を意図的に児童に出させることも行っている。特に深く考えさせたい場面では事前の打ち合わせで、T2 に任せることもあり、



途中発問者が変わることで、児童の意識をより高めさせる効果があるようである。

エ 中心発問について

今回の中心発問を『二人が「お互いに向けていた思い」はどのようなものだろう。』に設定した意図は、二人の共通の思いを考えることで本時のねらいに迫れると考えたからである。板書も構造的なものになっており児童が板書を見ながら振り返りを行い、自分の考えを整理して書くことにつなげた。導入で提示した「犠牲にしているのだろうか。」という発問を再度投げ掛け、「分からん。」と言っていた児童が自分なりの考えを持つことができてきている様子に、考えが深まっている変容を見て取り、学びがいのある授業であることが確認できた。

オ めあてに対して、学んだ結果を分類したことについて

学んだ結果を T2 が紙に書いて分類したのは、今回の指導案の最後の発問で児童の考えがおおよそ四つに分かれることが予想されたからである。四つの中から選ぶことで、友人の意見に共感したり、新たな発見や気づきを得たりすることができる。分類した中に、自分の考えがない場合があるため、「その他」も用意している。できるだけ納得したものを選んでほしい、「その他」を選んだ場合もその理由を書いてほしい、と考えている。T2 が児童の意見を聞きながら分類するのは難しく、時間を短縮するためにも紙を使用した。他のクラスで異なる考えが出ていた場合は、授業中に意見が書かれた紙を活用し、その考えを取り上げることもしている。

カ 振り返り(本時の学習を自分の生活につなげる)の工夫や思い

今までの生活で無意識に行動をしたり、思いやりのある行動をしたいと思っていたりする児童に心の中にある思いやりの芽に気付かせたい、という思いがあった。今回の授業の良い点は、思考のつながりを途切れさせずにできたことである。自分事として考えることができ、分類し、選択肢を用意することで、いつもはあまり深く考えない児童も自分の意見を持つことができた。今後の課題は、状況に応じてねらいに迫る意見以外の意見も取り上げることで、多様な考えを共有させることである。

(2) 参加者からの質問

- 教師が児童の意見に共感する場面で、「うん、うん」や「なるほど」と言っていたが、これは全校で使っている言葉である。「いいね」は使わないようにしている。
- 「めあて」の提示の前に、「思いやりは、自分を犠牲にしてするものでしょうか。」という終末で投げ掛ける発問を入れていたが、これを入れることで、導入で答えがでなくても、終末で、自分なりの答えを出すことができた児童を称揚することができる。
- 意見を分類する(まとめる)ことについて、全校体制でやっているわけではないが、分類する(まとめる)ことで考えに深まりが出る。
- この話は「よい話」か「悪い話」か、またその理由は、という問いの意図は、授業で考えさせたい場面を焦点化させるため、「どんな話だったか10秒でまとめてみよう」とねらいは一緒である。
- 教材が長い場合は、朝ドリルタイムなど、朝の時間を使って読ませることもある。
- 「壬生川スタンダード」をもとに、TTの流し方の柱を作り、人・もの・こととの対話を意識して、ねらいとする道徳的価値の明確化を図るようなめあての提示を行っている。

(3) コーディネーターからの助言

ローテーションTT道徳は、授業改善につながるだけでなく、授業の準備や振り返りを一緒に行うことで、人材育成にもつながる。道徳科では生成 AI も活用することが可能で、発問や児童の予想される反応も例示してくれる。今回研修に使った授業動画は「愛媛学びの森」などで公開されているので、ぜひ、校内研修等でも活用してほしい。

第2分科会 特色ある道徳教育推進事業推進校の取組を通して【中学校】

提案者 東温市立重信中学校 教諭 吉田 郷

1 発表のテーマと概要

特色ある道徳教育推進事業推進校における3年生の授業について、授業者が発問の意図や当日の生徒の反応について説明を行った。さらに、授業動画を視聴し、生徒たちの受け答え、教師による問い返しを確認した。授業におけるねらいと発問について、本分科会で検討を行った。

2 発表の内容

(1) 主題名

加山さんの願い（「新訂 新しい道徳3」東京書籍）

(2) 教材研究から

隣人の孤独死をきっかけに、訪問ボランティアを始めた加山さんが、二人の高齢者との関わりを通して、互いに尊重し合い、一人の人間として向き合うことの大切さや、真の奉仕の心とは何かに気付く姿からねらいとする道徳価値に迫った。また、加山さんの心情に共感させ、話し合いを進めることを通して、学校生活に生かすことができるよう公共の精神について考えを深めさせるとともに、人間としての生き方や社会の在り方について、主体的に考え、行動しようとする道徳的意欲、態度の育成を図った。

(3) 本時のねらい

二人の高齢者との交流の中で変化する加山さんの心情について考えることを通して、社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努めようとする道徳的実践意欲と態度を育てることを本時のねらいとした。

3 講義の内容

(1) 教材を読むときの視点

まず、次の4つの視点に沿って、教材を読み進めた。

- ① 生き方が道徳的に変化したのは誰か、何か。
- ② 主人公の言動や心情はどこで変化しているか。
- ③ 主人公が変化したきっかけは何か。
- ④ 主人公が自覚した結果どのような行為をしたのか。

(2) 発問の作り方と発問構成

第1発問は、人間のありのままの姿に共感させ、本音を引き出すための発問「共感」となるようにした。第2発問は、心の中の迷いや葛藤を呼び起こす発問「葛藤」について考えることができるものとした。第3発問は、より善い生き方や在り方、人間としての誇りに触れて、道徳的価値の自覚を深める発問「覚醒」となるようにした。他の教材の授業でも、このような流れで発問を考えたものがある。どの授業でも、生徒がどのように考えるのか、生徒の思考の流れを考えながら、発問や発問の構成について練り上げていった。

(3) 動画視聴を通して

ア 第1発問（共感）

加山さんの中にある、どこか相手を軽視しているよ



うな考え方が現れており、誰もが持つ人間としての弱さが出ている部分に気付かせたいと思った。そうすることで、生徒が実際に自分の経験を基にして加山さんの気持ちに共感できると思い、この第1発問を設定した。加山さんの中の「怒り」の気持ちにより共感すると考えていたが、実際の授業では、「悲しい」気持ちに共感する生徒の方が多かった。生徒に、「共感できる意見はありますか。」と問い返したところ、生徒の多くは共感できると反応したが、中には加山さんに対して反感の思いを持っている生徒もいた。

イ 第2発問(主発問・葛藤)

「今までの自分」からその後の覚醒に至るまでの過程の部分で、変わろうと心が揺れ動いている場面の加山さんの思いや考えについて問うことで、生徒が様々な角度から考えた意見が出てくるのではないかと考えた。生徒からは、「田中さんの世話をすることで達成感を感じていたが、田中さんは辛い思いをしていた。」「自分は本当に地域の人の役に立ちたいと考えられているのか。地域の人々の思いに寄り添っているのか。」「後藤さんが言っていたように、いい格好をしたいだけじゃないのか。」などの反応があった。

ウ 第2発問(主発問・葛藤)の問い返し

生徒からは、「世話をしただけではなく、するという考え方が当たり前じゃないといけない。」「してあげるといふ考え方は、田中さんは辛い思いや悲しい思いをするので、反省すべきだと思う。」「達成感を感じることで自分が悪いとは思わないが、それが態度に出ると相手にしんどいと感じさせてしまうのが良くないと思う。」などの反応があった。

エ 第3発問(覚醒)

第2発問から問い返しをして考え方を深めていき、最後の「加山さんの肩の力みがぬけて何をするのも楽になった。」のところで、今回のねらいとする部分につながるような意見が出て、更に生徒の考えを深めたいと考え、中心人物の心が変容した後の場面で第3発問を行った。生徒からは、「中井さんと話すことによって自然体でいる方がより良くなれることに気付いた。」「自分ができることを一つ一つしていくことで、それが人助けにつながるのだから無理に力んでやる必要はないんだという事に気付いた。」「自分ができることをして、支えあっていこうと前向きな気持ちになることができた。」という意見が出た。

(4) 参加者からの意見

- 加山さんの心情として、「思い通りにならないからと言って簡単に中井さんの訪問をやめるわけにはいかなかった。それでも、行かなくてはという義務感から訪問を続けていた。」「『いいかっこうをしたいのでもありません』と言いたかった。だが、言えなかった。中井さんのことを思うと自信がもてなかった。」のところが加山さんの葛藤ではないかと思う。教材には「腹立たしい」「情けない」と書かれており、「腹立たしいという気持ちに共感できるだろうか。」と聞けば、「簡単なことだと思っていた。」「できることがあると思っていたのにそんな反応をされて腹立たしい。」気持ちには共感できそうである。
- 情けないと思った理由を問えば、そこで文章に書かれていない複雑な加山さんの「してあげよう」という気持ちがあったことを生徒が考えたのではないか。加山さんは「思わず立ち止まった」「傘を持ったまま考え続けた」という部分の加山さんの気持ちは教材に書かれている。書かれていることを生徒たちに考えさせるのではなく、最後の発問を、田中さんに謝らないといけなかった理由を聞けば、「辛い思いをさせていたのは、自分だったから」というような反応が出てくるのではないかと思う。

第3分科会 シンポジウム【小学校】【中学校】

提案者 松山市立生石小・垣生小学校 非常勤講師 齊藤 照夫
日本道德教育学会四国支部 副支部長 坂井 親治

1 本分科会の概要

本分科会では、子どもが学習問題（発問）を考えて主体的に学習に取り組む道德科の授業や、子どもが自分の生活経験を生かし、自分との関わりを深く考える道德科の授業について、シンポジストの具体的な提案を基に、参会の先生方との意見交換を交えて、議論を深めていった。

2 発表及び協議内容

(1) 子どもが主体的に取り組む道德科の授業とは～子どもたちを信頼し、子どもたちに学習を委ねる

「子ども主体の学習ができていないか。」「教師による誘導があるのではないか。」と教師が自分の授業を見つめ直すことが求められる。極端なことを言うと、子どもたちに道德学習を任せるのである。例えば、問題解決型の学習であれば、解決すべき道德的問題を子どもたちにつくらせる。子どもたち主体の学習にするには、問題づくり→解決の実行→解決内容の発表の学習のパターンに慣れさせることが必要である。問題づくりは、教材に触れた後、登場人物の言動で一番心に残ったところを決めることからスタートする。決まれば「どうしてそのような言動をしたのだろうか」と続ける。これで問題ができる。子どもたちのとらえ方は多様であるため、複数の場面が予想される。その場合は、複数の問題となる。授業で取り扱う問題を一つに絞るか、複数設定するかは指導者判断であろう。あと解決まで子どもたち同士で取り組むが、大切なことは慣れるということである。指導者のコーディネートと子どもたちへの信頼がカギとなる。



(2) 道德の時間は何をする時間か～二つの不可欠な学習

一つ目は、多様な価値観に基づく多面的・多角的なものの見方や考え方に触れる時間である。二つめは、自己を見つめ、自分の生き方や素晴らしさに気付く時間である。教師は、子どもたち一人一人がもつ価値観を引き出すための指導をしなければならない。そのためには、「どうしてそのように考えたか、思ったか」という問い返しが必要である。言動の根拠を明確にさせるのである。また、自己を見つめることにより、自分自身に誇りをもつ、自尊感情を高めることが最も大切である。しかし、実際の授業では、自己を見つめる時間を十分にとることができず、自尊感情を高めることなく終わってしまうことが多く、大変残念である。子どもが道德的価値の行為はできなくても、やってみようとする自分に気付き、これからもやっといこうと意欲をもつ、これが大事である。ぜひ自己を見つめる時間を十分に取るように教師が意識をしてほしい。この二つにより、よりよく生きるための基盤となる道德性を養う時間になってほしい。

(3) 問題解決型の学習 教材「二わのことり」

問題解決型の学習にするには、子どもたちに学びを委ねた学習問題を創ることが大切である。教材提示の前に、「心に残ったことを聞かぬ」と先に伝え、教材提示の後に、「一番強く心に残ったことは何か」を聞く。そして、「ウグイスの家を出て行く主人公の行動や心情を通して、友達のことをどう考えているか」を考えさせる。その際、教師が価値理解を広く捉えているかが大事である。子どもの発言を板書する。話し合いの仕方をコーディネートする。教師は、指導者の役割を捨てて、支援者となるべきである。

(4) 考え・議論する道徳の授業

ア 子ども同士の話し合い

子ども同士の話し合いの中では、道徳内容を「伝える、伝え合う」から「新たなものを創る活動」が大切である。

高学年になるほど「伝達から創造へ」と話し合いを高めていくのがよい。話し合いで大切なことは、それぞれのよいところを見付けること、互いのよさを認め合うことである。相手を尊重できる土壌があってこそよりよい話し合いができる。互いのよい考えを合わせることで納得でき、話し合いにより連帯や絆が生まれる。全体の考えと自分の考えを比べて、最終的に自分自身が納得するものを見付ける。授業形態はいろいろあってよい。

イ 何を考え、何を議論させるか

考えることは、登場人物の生き方から自分の生き方を考えることである。議論すべきことは、登場人物の生き方であり、互いに自分の考えを発表することによって、自分とは異なる様々な考えがあることを知ることである。教師は子どもたちの対話をリードすることが大切である。

(5) テーマ学習 教材「二通の手紙」

誘導型から追求型への授業が大事である。子どもが何を考えたいか、子どもの意欲を尊重しながらテーマにも沿うようにするには、発問を分類するためのマトリックス(資料1)を作成する。そして、予想される考えとテーマから子どもの実態に合わせて中心発問を設定する。導入では、どんな話を10秒で言ってみる。それを凝縮して問いにするとテーマになる。これは、子どもたちが考えてみたい・話し合いたいと思う問いと一致することが多い。授業においては、ねらいとする道徳的価値と中心発問が一致することが大事である。学年間で協力し、負担を軽減し、全ての教師が道徳の授業を楽しむとよい。

☆ 二通の手紙(違法精神、公德心)C-10

	ア 共感的	イ 分析的	ウ 投影	エ 批判
	〇〇はどんな気持ちかオフブンド	〇〇がそうしたのなぜかオースドンド	もし自分が〇〇ならどうするか	〇〇したことをどう思うか
A 場面 どんな気持ち	入園したいという姉の話を聞いて、元さんはどんなことを考えたでしょう	きまりがあるにもかかわらず、なぜ入園させたのか	もし、自分が元さんの立場だったら姉弟を入園させますか	姉弟を入園させた元さんをどう思うか
B 人物 どう思うか	元さんが姉弟を入園させたことをどう思うか	元さんのできごとを思い出しながらきそくを守っている佐々木さんをどう思うか	もし自分が二通の手紙を前にしたらどう思うか	晴れ晴れとした顔で片付けはじめた元さんをどう思うか
C 資料 どう思うか	二通の手紙を前に元さんはどう思ったのか	元さんはなぜ規則を破ってまで姉弟を入園させたのだろう	あなたが元さんなら姉弟を入園させますか、させませんか	姉弟を入園させた元さんの批判に賛成、反対ですか
D 価値 (規則)とは	元さんが「この年になって初めて考えさせられた」とは何か	元さんが二通の手紙を前にして考えた、「きまりを守る」とは何か	もし自分が決まりを破るかもしれないときはどんな時か	きまりは守らなければならないのか

資料1 発問のマトリックス

(6) 質疑応答

【質問:自我我関与が難しい偉人や昔の話のときは、どうしたらよいか。】

- 自我関与は特に低学年には難しい。登場人物に自分を投影してその判断や心情で考える。教材に内在する道徳的価値を通じて、自分との関わりを見つめる。教材と同じことは起こらないが、教材の道徳的な価値を通じて考えることはでき、自分なりに解釈できる。
- 自分事として考えることで大切なことは、子どもたちの学校生活の中(掃除の場面、体験学習、行事)に道徳的価値が含まれている。それらの体験活動の中で道徳的価値につながる子どものつぶやきや発語、行動をよく観察する。そして、見つけたときは「どうしてそんなことを考えたのか、したのか」を問い、それが道徳の内容に当たることを伝え、すごいねと大いに称揚する。これらの種まきしておくことが大切である。このことを授業の中で発表させ、みんなで称えることで、自尊感情は高まる。この高まりが大きいほど自分の生き方をしっかり考えるようになる。
- 鬼北町の小学校の授業では、自分たちでテーマを決めて、合意形成し、まとめていた。「ごみをすてるな」という立て札のところで「捨てる」と発言した1名の発言を大事にして子どもたち同士の話し合いを行った。これにより、次にこの場を使うすべての人たちのために、「やくそく」「きまり」はあるから、立札に書かれたことは守らないといけないという結論を自分たちで導き出した。
- 10歳以上からは、今までの他律的から自律的道徳性が育つと言われている。その視点からも、自分たちで問題意識に向き合い、進められるのは高学年からが望ましい。また、子どもの意見からテーマや中心発問を引き出す。子どもの興味・関心に着目して、子どもに寄り添いながらねらいとする価値理解が深まる発問に心掛けて授業を創るのがよい。

特別講演記録

演題「考え、議論する『特別の教科 道徳』の一層の充実に向けて」

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部 教育課程調査官 大平 剛生先生

1 はじめに

皆様、改めてこんにちは。国立教育政策研究所からまいりました、大平でございます。

先ほどご紹介いただきましたように、私は元々、広島県の高等学校で15年間教諭として勤務しておりました。高等学校には「特別の教科 道徳」という時間がございません。その代わりに、学校の教育活動全体を通じて道徳教育を推進していくことになっています。その中でも、特に中核的な指導の場面に位置付けられているのが、教科で言いますと公民科の中の「公共」や「倫理」、そして「特別活動」の三つです。県教育委員会に勤務していた際には、高等学校の道徳教育などの指導を担当し、小学校や中学校の道徳科の授業も数多く拝見する機会をいただきました。そのような経験から、現在この立場で皆様にお話しさせていただいております。



2 愛媛への特別な思い

今日、このような場にお招きいただいたこと、大変うれしく思っております。実は、私は愛媛県に理屈抜きで特別な思い入れを持っています。幼少期をこの松山の地で過ごしたからです。松山空港から少し東へ行ったところに、松山市立生石小学校がございます。この中に生石小学校のご出身の先生はいらっしゃいますでしょうか。私はその生石小学校の卒業生です。さらに生石小学校から少し東へ行きますと、松山市立西中学校がございます。西中学校ご出身の先生はいらっしゃいませんか。私は西中学校に2年間通い、中学2年生までをこの地で過ごし、父の仕事の関係で中学3年生から他の都道府県へ転校しました。

当時、生石小学校は一学年が7クラス、ほぼ40人ずつの満員状態で、280人くらいいました。それが六学年分です。西中学校も9クラスあり、こちらも1,000人を超える規模でした。私は第二次ベビーブームの真ただ中に生まれたため、非常に多くの児童生徒の中で過ごした記憶があります。私にとって、それが当たり前の日常でした。

この話ばかりしていると時間がなくなってしまうのですが、当時の生石小学校には木造校舎が2棟残っており、私が小学校6年生の時に取り壊されました。重機が入って大きな音を立てて解体されていくのを、私は6年生ながら非常に寂しい気持ちで見っていたのを今でも覚えています。その木造校舎には児童会の部屋があり、私は児童会に入っていたため、人一倍愛着がありました。廊下はすべて木造で土間もありました。廊下を端から端まで雑巾がけをした記憶もあります。校舎の手すりはとても太かったのですが、それがツルツルに磨耗して丸くなっていました。それを見ながら、「こんなにも木が人の手で削れていくのか」と考えたのを今でも覚えています。

そんな思い出があるこの地で、今日、お話しする機会をいただきました。松山空港の様子は本当に様変わりしていましたが、幼い頃に歩いた街には理屈抜きの愛着があります。そして、そこで働いていらっしゃる先生方を、理屈抜きで応援したいという気持ちで、本日はここへやってまいりました。また機会がありましたら、ぜひお声掛けいただきたいです。

これから、主に「特別の教科 道徳」の充実に向けてお話ししますが、道徳科は道徳教育の「要」となる

時間です。しかし、それだけでなく、道徳教育全体をしっかりと進めていくことが重要です。その際に、今日私が一番お伝えしたいのは、小学校と中学校の連携です。小学校の先生方には、中学校でどのような授業や取組が行われているのかを知っていただくことが大切です。同様に、中学校の先生方には、今、目の前にいる子供たちが小学校でどのような道徳教育を受けてきたのかを理解していただくことが重要だと考えています。

また、今、学習指導要領の改訂に向けた検討が始まったばかりです。もし時間がありましたら、そのことについても少しお話をさせていただければと思います。話の中で、皆様にもご自身で考えていただく場面を設けております。ランダムにお座りいただいているかと思っておりますので、お近くの先生とぜひお話をし、ご意見を交わしていただければ幸いです。

3 研究大会のテーマから読み解く道徳教育

まず、今回の研究大会の配布資料を事前に拝見いたしました。その中に、非常に重要なことがたくさん書かれていると感じました。

研究主題が「よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ」と書かれています。単に「道徳性が育つ」ではなく、「よりよく生きるための基盤」という部分が非常に重要です。これは、指導要領の趣旨にも深く関わる点です。副題に「その授業を要として」とあるように、授業が道徳教育の中心を担うことが示されています。

第1分科会のご提案には、「問い」についての記述が見られました。中心発問や切り返し発問など、様々な「問い」がありますが、発問を立てる力、つまり「問う力」が非常に求められています。「考え、議論する道徳」を質的に充実させるためには、この力が不可欠であるという点で、大変重要な指摘だと感じました。

また、第2分科会のご提案には、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育についても情報交換を行います」と、あえて一行書かれていました。これは非常に大事な点です。とかく道徳科の授業に目が向きますが、やはり一番大切なのは、道徳教育を学校全体で進めていくことです。すばらしいご提案をいただいていると思います。

さらに、第3分科会のご提案には、「道徳的価値の理解はできても、自己を見つめ、生き方についての考えが深まっていないことが課題ではないか」というご指摘がありました。まさにその通りだと感じます。これらの分科会のご提案は、道徳教育の重要な点を的確に捉えていると思います。

本日の私のお話は、小学校と中学校の内容が混在しておりますので、それぞれの校種の先生方は、ご自身の校種に必要な部分に読み替えてお聴きいただければと思います。

4 道徳教育の目標と「要」としての道徳科

道徳教育の重要性は、教育基本法第1条に示されている「人格の完成」と「国民の育成」に直結します。そして、教育基本法第2条には「道徳心」という言葉が明記されており、これを受けて道徳教育の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」と明確に定められています。これは、学校の教育活動全体を通じて行うものとされています。

小学校では「自己の生き方」、中学校では「人間としての生き方」が目標とされていますが、道徳性を養うという根本的な目標は、小学校、中学校、そして高等学校の全ての校種で共通しています。

先ほどお話ししたように、道徳科は道徳教育全体の「要」です。各教科、総合の時間、特別活動など、それぞれの時間で道徳性を養うことは重要ですが、それだけでは足りない部分があります。その不足を補ったり、さらに内容を深めたりするために、道徳科が存在します。給食や掃除の時間も含め、学校の教育活

動全体で道徳教育を進めていくというイメージを大切にしていきたいと思います。

道徳科が設置された経緯には、量的・質的課題のほか、社会的ないじめの問題が大きく影響しています。これを受けて、量的な確保と質的な転換を図るために、平成27年に学習指導要領の一部が改訂されました。

道徳科は「特別の教科」ですが、教科書を使用し、成長を促すための評価も行います。また、「答えが一つではない課題」に対して、子供たちが主体的に「考え、議論する」ことを重視するようになり、平成30年度から小学校で、平成31年度から中学校で全面実施されました。今年で小学校は8年目、中学校は7年目になります。

5 道徳科の目標と学習課程

道徳科の目標は、道徳性を養うために、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己や人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることです。

この目標は、そのまま道徳の学習過程を示していると捉えることもできます。道徳的諸価値についての理解は、小学校では「価値理解」「人間理解」「他者理解」という形でくわしく書かれています。また、自己を見つめることは、小学校では「これまでの自分の経験と照らし合わせながら」とあるのに対し、中学校では「自己との関わりも含めて理解し、内省する」と表現されています。

「多面的・多角的に考える」ことは、価値観には多様な側面があることや、それを様々な角度から捉えることを意味します。中学校ではさらに「広い視野から」という言葉が加わり、人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図るという視点が含まれています。また、「物事の本質を考え、そこに内在する道徳的諸価値について見極めようとする」ことも求められます。これは、目に見える事象の奥にある、意識しなければ見えてこない道徳的価値を捉えようとすることです。

「生き方についての考えを深める」ことについて、小学校では自分の体験と結びつけて「自分ごと」として考えることに力点が置かれています。対して、中学校では、人生や生きる意味を「考え始める」「模索し始める」というところに力点が置かれています。決して、答えが見つかるのが中学校だとは書かれていません。

中学校の解説には、「人間についての深い理解と、これを鏡として行為の主体としての自己を深く見つめることとの接点に、生き方についての深い自覚が生まれていく」という難しい表現があります。これは、人間の在り方について考えたことを「鏡」として自分に照らし返し、内面を深く見つめ直す、というイメージです。

6 道徳性の捉え方と内容項目

こうした学習を通して育む道徳性は、人格的特性や内面的資質です。これは、数値で評価したり、各要素を切り離して評価したりするものではありません。判断力、心情、実践意欲と態度という諸様相を総合的に、調和的に育てていくことが重要です。

道徳科の内容項目は、小学校では低・中・高学年で示されており、中学校では22項目が示されています。これは指導の順序や価値の序列を示すものではありません。それぞれの視点（自分自身、人との関わり、集団や社会との関わり、生命や自然・崇高なものとの関わり）は深く関連し合っています。

この内容項目は、道徳的な価値の理解に関する答えを示すものではなく、教師と児童生徒が共に考え、語り合い、実行に努めるための共通の課題であり、道徳性を養うための手がかりとなるものです。したがって、言葉を教え込んだり、一方的な押し付けになったりしないよう留意することが大切です。

7 内容項目から見る発達段階に応じた指導

指導にあたっては、内容項目に関連性を持たせることが示されています。ただし、授業が終わったときに、結局どの内容項目について考えさせたかったのかが不明確になるような、「焦点が不明確な指導」にならないよう注意が必要です。

また、同じ内容項目でも、学年が上がれば発展性を考慮した指導を行う必要があります。たとえば、中学校で同じ内容項目を1年生と3年生で扱う場合、同じ授業になっていないかを考えることが大切です。

ここで、皆様に少し考えていただきたいと思います。学習指導要領の解説から抜粋した「礼儀」という内容項目について、小学校の低学年、中学年、高学年でどのように書き分けられているか、そして小学校にはない、中学校にだけ書かれていることは何か、お近くの先生と話し合ってみてください。

～ 会場での対話 ～

ありがとうございます。今、お答えいただいたように、低学年では「気持ちのよい挨拶、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接すること」とあり、礼儀という言葉は使わずに具体的な行動で示しています。中学年では「真心をもって」という言葉が加わり、高学年では「時と場をわきまえて」という視点が入ってきます。そして、中学校では「礼儀の意義を理解し」と書かれています。この「意義」を考えることが、中学校の特色の一つです。なぜ礼儀が必要なのか、といった問いを立てることが重要になってきます。

もう一つ、「自然愛護」という内容項目についても見てみましょう。小学校の低学年では、「生き物や自然に親しみ、大切にすること」とあり、中学年では「自然のすばらしさや不思議さ」という言葉が加わります。高学年では「自然の偉大さ」、そして中学校では「自然の崇高さ」と表現が変化しています。「すばらしさや不思議さ」「偉大さ」「崇高さ」の違いをどう捉えるかは、授業者として、一旦言葉にしてみる必要があります。

正解があるわけではありませんが、解説を手掛かりとして、先生方お一人お一人が、ご自身の言葉でその違いを捉え、授業のねらいを定めていただくことが大切です。

特に、中学校の解説は、小学校のように学年ごとの違いが明記されていません。これは、1年生から3年生までの3年間で、授業者が発達の段階に応じて創意工夫を凝らすことがより一層求められている、ということでもあります。

8 道徳科の指導における工夫

道徳科の指導では、「道徳的価値を自己との関わりにおいて捉える時間」にすることが重要です。中学校では、「複数の道徳的価値の中からどの価値を優先するか判断を迫られる」こともあり、その際に多面的・多角的に考察する力を養います。授業の導入、展開、終末を工夫し、特に終末では、道徳的価値の実現が難しい面もあることを押さえることも大切です。

また、道徳科におけるICTの活用にもぜひ取り組んでいただきたいと考えております。先日、文部科学省のホームページで各教科のICT活用事例が公開されました。道徳科の事例も掲載されており、中学校の事例では、自分の意見に対する友達のコメントを複数読んだり、意見の対立する事例を考える際に、心の状態をハート型のグラフで可視化し、対話を深めたりする様子が紹介されています。小学校の事例では、授業の冒頭でアンケートをとり、その集計結果を円グラフで示して、友達との考え方の違いを認識させるという工夫がなされていました。これは以前にはできなかったことで、ICTを活用することで、特色ある授業が可能になります。

9 指導要領における道徳教育の重要ポイント

現在の学習指導要領では、問題解決的な学習も示されています。ただし、実際に起こっている問題を

解決すること自体が目的ではありません。問題解決の過程で道徳的価値について考え、道徳性を養うことが重要です。

また、体験的な学習を取り入れることも大切です。修学旅行やボランティア活動を経験した後に、道徳科で「集団生活の充実」や「社会参加」といった内容項目を扱うことで、単なる体験を道徳的な価値へと置き換えて考えていくことができます。

さらに、情報モラルに関する指導も求められています。ここでも、情報機器の使い方や操作方法に終始するのではなく、思いやり、感謝、礼儀、遵法精神といった道徳的な価値について考えを深めることが重要です。

現代的な課題も扱いますが、常に道徳的な価値の視点を忘れてはいけません。科学技術の発展に伴う生命倫理の問題や、社会の持続可能な発展に関する問題など、そこには必ず道徳的な価値の葛藤が含まれています。その葛藤から道徳的価値を取り出すことが大切です。

10 評価と推進体制

道徳科の評価については、個人内の成長過程を重視し、努力を認め、励ますことが基本です。発表が上手だったか、文章が上手に書けていたかといった「学習活動の評価」ではなく、道徳性の成長の様子をきちんと見てとることが重要です。文章が拙い表現であっても、そこに成長の様子が少しでも見られれば、積極的に受け止めて評価していく必要があります。また、各学校で道徳教育の中心を担う推進教師の先生方には、全教師が協力して道徳教育に取り組むための中心となっていただきたいと願っています。目的は「全教師の協力・参画」であり、推進教師の役割はその実現のための手段です。この目的と手段を入れ替えることのないよう、ご留意ください。

11 学習指導要領改訂と道徳教育の未来

そろそろお時間となりましたので、最後に概ね10年に一度の学習指導要領の改訂についてお話させていただきます。

昨年12月25日、中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問されました。これからの社会がどうなるかという分析がなされており、少子高齢化の進展や、生成AIを含む技術の加速度的な進展が指摘されています。求められる力として、「自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性」や「持続可能な社会の創り手を育てることの必要性」などが挙げられています。

検討内容としては、まず「分かりやすい学習指導要領の在り方」についてです。

また、一つの教室の中に多様な子供たちが存在するという課題も指摘されています。日本語を話さない子供、学力が低い傾向がある子供、不登校傾向の子供など、様々な背景を持つ子供たちすべてに対応するため、「多様な子供たちを包摂する、柔軟な教育課程の在り方」の検討を求めていることが示されています。

これからの時代に育成すべき資質・能力を踏まえた、各教科等やその目標・内容の在り方について教科ごとにも議論されていきます。

もう一つの論点は、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策等についてという点です。これらの4つの点について、現在、議論が進められているところです。

道徳教育についても、これから改訂の議論が始まっていくわけですが、講演の冒頭で申し上げたように、これからの社会を生きる子供たちにとって何が必要なのかを、私たちは考え続けなければなりません。社会がどんな状況になろうとも、教育の根幹である道徳性を育むという使命は、なくなることはなく、むしろ

重要性は高まっていきます。道徳教育や道徳科について、本日この場で学びを深めておられる先生方は、まさに教育の根本を考えようとされていることだと思います。最後に、そのことをお伝えしたく存じます。

12 結びに

宣伝のような形になり恐縮ですが、文部科学省では「道徳教育アーカイブ」というホームページを作成しています。小中学校の実践事例が掲載されており、実際の授業の様子や授業者へのインタビューがご覧いただけます。今後の授業づくりの参考になるとと思いますので、ぜひ一度ご覧ください。

初等教育資料や中等教育資料にも実践事例や解説が掲載されておりますので、こちらもご活用いただければ幸いです。

それでは、時間になりましたので、私の話を終わらせていただきます。最初に申しあげました通り、私はこの愛媛という地に特別な思いを持っています。そこでご活躍されている先生方を、本当に理屈抜きで応援したいと思っています。また何かの機会がございましたら、ぜひ一緒に勉強していけたらと思います。

本日は長時間にわたりご清聴いただき、誠にありがとうございました。

Ⅲ 研究大会報告

第61回全国小学校道徳教育研究大会(広島大会)

松前町立北伊予小学校 渡部 陽子

1 大会日程及び会場

- ◇ 第1日 令和7年11月20日(木) 広島国際会議場全体会
基調提案 課題別分科会 記念講演
- ◇ 第2日 令和7年11月21日(金) 広島市立石内北小学校
公開授業 学年別分科会 指導講話

2 大会主題

自己を見つめ、共によりよく生きる児童を育む道徳教育

3 大会の概要

(1) 課題別分科会(第5分科会「家庭や地域社会との連携による道徳教育」)

ア 愛媛県松前町立北伊予小学校

地域の特色を生かした地域教材の開発・活用についての実践発表があった。題材の選定から教材文及び指導案の作成まで地域教材を開発する手順と成果について説明があった。地域教材の作成は多くの労力を要するが、児童が自分事として考え、地域への愛着を高める上で効果的である。参加者からは自校でも取り組んでみたいというような前向きな意見が寄せられた。

イ 岐阜県笠松町立笠松小学校

「あいさつ」「そうじ」「いきもののせわ」の「3つのじまん」を柱に、家庭や地域と連携を図りながら日常生活の中で道徳的実践力を身に付ける取組を行っている。そこで、道徳科の授業のみならず、学校教育全体で取り組むことができるように「総合単元的プログラム」を作成し実践していた。また、「ボランティア手帳」や「ダイヤモンドカード」などを活用することで、児童の自己肯定感の高まりにもつながっていた。

(2) 公開授業

3年生の授業では、「すてきな友達同士」を主題に授業が展開された。互いの意見を聞き合う関係づくりを重視しており、対話的な活動の中で友達の意見に反応したり、児童同士で問い返したりする姿が多く見られた。また、教師のファシリテート力が優れており、児童が次々と発言をつなげていく中で適切な問い返しをして話題を焦点化し、ねらいとする道徳的価値について迫ることができていた。

(3) 授業研究分科会

互いの意見を聞き合う関係づくりについて多くの意見が出された。指導者は、友達の意見に反応するためにはまずは「聞く」、そして意見を「つなぐ」という2点を児童に言い続けたということであった。また、教師は「沈黙を恐れない」ということも重要で、すぐに教師が入るのではなく、児童は沈黙していても考えているのだから、じっくりと待つ時間も必要であるということも言われていた。さらに、教師の問い返しについても意見が出された。児童に問い返したいことはたくさんあるが、話題を焦点化するためには指導の意図を明確にした授業設計をすることが重要であることを再認識した。

(4) 指導講話(「自己を見つめ、共によりよく生きる児童を育む道徳教育」 堀田 竜次 教科調査官)

道徳科の特質は、内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であるということである。「考え、議論する道徳」の視点から、児童が自分の考え方、感じ方を明確にしたり、多様な考え方と出合ったりする場面をしっかりと取らなければいけない。教師は、明確な指導の意図を持ち、指導方法を工夫しながら授業改善に取り組み、児童が自己の生き方についての考えを深めることができるような授業を行っていくことが重要である。

第59回全日本中学校道德教育研究大会岐阜大会

松山市立勝山中学校 森脇 和夫

1 大会日程及び会場

- ◇ 第1日 令和7年11月27日(木) 岐阜市立長良中学校
公開授業・研究討議・指導助言
- ◇ 第2日 令和7年11月28日(金) ホテルグランヴェール岐山
開会行事・基調提案・課題別分科会・指導講話・閉会行事

2 大会主題

自他ともによりよい生き方を求め、実践する生徒を育てる道德教育はどうあるべきか

3 大会の概要

(1) 公開授業

『3年生 主題名:規則を守ることとは 【C 遵法精神、公德心】』

教材名「二通の手紙」の授業を参観した。全ての公開授業で、問題解決的な道德学習に取り組んでおり、本授業は「源さんの行動で問題だと思うところ」について生徒が議論する展開だった。生徒たちは葛藤しながら問題解決に向けて議論する中で、道德的価値の自覚を深める授業であった。

(2) 研究討議・指導助言

研究討議では、生徒たちは葛藤しながら内面では道德的価値を自覚しているが、それが道德的実践意欲・態度まで育っていないと意見が出た。授業者は、時間が不足したため本時の振り返りをしながら指導を継続すると回答があった。指導助言では、問題解決的な学習や指導案の作り方など、岐阜県の取組について説明があった。特に、人間理解の思いをもとに、生徒の発言の思いをつないで広げ、道德的価値の理解を深めて、人間としてどう生きていくかを考えさせたいと言われた。

(3) 基調提案

岐阜県の取組として、①「人間としての生き方についての考えを深める道德科の指導」:発問の工夫(発問の精選や補助発問等)を中心に道德科の特質を生かした多様な指導法、②「全教育活動の要としての役割を果たす道德科の指導」:道德性の育成につながる道德教育の在り方及び要となる道德科の役割、③「家庭や地域社会との効果的な連携による道德教育の推進」:道德教育を通して育んだ道德性(道德的な判断力、心情、実践意欲と態度)を家庭や地域社会でも主体的に発揮できるよう効果的な連携の在り方、についての説明があった。

(4) 課題別分科会

「ICTを効果的に活用した道德科の授業づくり」部会で、秋田県八郎潟町立八郎潟中学校の実践報告があった。①実態を知る(導入)、②他者の考えを知る、③全体で意見を共有する、④意図的な出会いをつなぐ、⑤自己を見つめる、⑥話し合う、⑦実態を提示する、⑧自分の考えを持つ、⑨自己の生き方について考え方を広げる、それぞれの場面において、ICTや様々な思考ツールを活用し、自分を見つめる場面をより深める取組をしていた。

(5) 指導講話

教科調査官の大平剛生様が、道德科と道德教育の現状について様々な調査結果を基に話された。また、次期学習指導要領の論点についての詳しい説明があった。教育課程企画特別部会から「論点整理」が出された直後であったので最新の情報を聞くことができた。また、道德教育の充実に向けた取り組みについて理解を深めることができた。

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基礎となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を通して -

2 研究のあゆみ

(1) 道徳主任会(4月)

- ア 役員選出、研究主題の設定、研究計画の立案
- イ 情報交換

(2) 市内小学校教科等研究会(9月)

3 研究の内容

- (1) 研究授業 9月17日(水) 授業者 第2学年 四国中央市立川之江小学校 教諭 石川 真有
- ア 主題名 よいと思うことを【A 善悪の判断、自律、自由と責任】
 - イ 教材名 わすれられない えがお(「新編 新しい道徳2」東京書籍)
 - ウ ねらい 正しいと思ったことは、進んで行おうとする心情を育てる。
 - エ 準備物 挿絵、センテンスカード、学習者用端末、ワークシート、言葉のパレット
 - オ 展開

学習活動	主な発問と予想される児童の反応	○指導上の留意点 ◎評価(評価方法)
<p>1 めあてを確認する。</p> <p>2 教材を読み話し合う。</p> <p>(1) 足を踏んでしまった後のせいこの気持ちを考える。</p> <p>(2) せいこが謝れた理由を考える。</p>	<p>○ わざとではないけれど、友達にぶつかってしまったときどうしますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ごめんね」と謝る。 ・いけないことは分かっているけれど、謝れない。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 正しいと思ったことをするには。 </div> <p>○ 隣のおばさんの足を踏んでしまった後、せいこさんは、どんなことを考えていたでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうしよう。 ・怒られないかな。 ・怖いな。 ・謝らないといけない。 <p>○ どうして、せいこさんは謝ったのだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの言葉を思い出したから。 ・自分も相手もすっきりするし、いい気持ちになるから。 ・おばさんがもやもやした気持ちのままだといやだから。 ・わざとじゃなくても謝ることが大事だから。 ・勇気が出たから。 	<p>○ 心のものさしに自分の立場を表し可視化することで、自分事として捉えられるようにする。</p> <p>○ バスに乗るとい生活経験が少ないので、資料を提示したり、あらすじを紹介したりすることで、状況を分かりやすく把握できるようにする。</p> <p>○ 主人公の葛藤に共感させることで、多様な考えが出るようにする。</p> <p>○ なぜ正しい行動ができたのかを考えさせることで、正しいことを進んで行うことの大切さに気付かせる。</p>

<p>(3) 謝った後のせいこの気持ちを考える。</p> <p>3 今までの生活を振り返り、これからの自分について考える。</p>	<p>○ 謝った後で、せいこさんはどんな表情をしていたと思いますか。それは、どうしてですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・にっこりした顔をしている。自分も相手もいい気持ちになったから。 ・ほっとした顔をしている。謝ることができてすっきりとしたから。 ・もっと早く謝れば良かったから。 <p>○ はじめと比べて自分の気持ちがどのように変わったのか、心のものさしに書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手もいい気持ちになるように謝りたい気持ちが強くなった。 ・はじめは謝れないと思っていたけれど、謝るとすっきりすることが分かったから謝りたい。 <p>○ 今までの自分のこと、今日の学習で考えたこと、これからの自分についてワークシートに書きましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はじめはすぐに謝れないと思ったけれど、学習をして、謝ることが大切だと思った。 ・今までは正しいことを言えなかったけれど、これからは言えるようになりたい。 ・正しいと思ったことをすると自分も相手もいい気持ちになるから、進んで行きたい。 	<p>○ 生成AIで作成した複数の表情を提示し、その中から選ぶことで、登場人物の心情を考えるヒントにする。</p> <p>○ 言葉のパレットを活用しながら選んだ理由を話し、友達と自由交流をすることで、深く考えさせたり、多様な考えがあることに気付かせたりする。</p> <p>○ 勇気を持って正しいと思う行動をしたことが、すがすがしい気持ちに結び付いたことに気付かせる。</p> <p>◎ 正しいと思ったことを進んで行おうとすることの大切さに気付くことができたか。(発表・ワークシート)</p> <p>○ 正しい行動をしようとする意見を肯定的に振り返ったり、友達の話の聞いたりして、進んで行動しようとする心情を高める。</p>
---	---	--

(2) 研究協議

- 言葉のパレットを使った継続した実践が、伝え合う力の育成につながっていた。
- 生成AIでの挿絵作成など、積極的なICT機器の活用ができていた。
- 登場人物の表情を選ばせることで、友達との考えの違いや微妙なニュアンスを伝えることができていた。
- 葛藤の場面でもっと揺さぶりをかけると良かった。また、様々な場面設定や問い返しなどがあったりも良かった。

(3) 指導助言

- 心のものさしの導入は、低学年の児童に分かりやすかった。終末で再び心のものさしに戻ったことで、自分の考えの変容が分かるように工夫されていた。
- 焦点化や視覚化、共有化ができており、デジタルとアナログのベストミックスができていた。
- 表情を選んだ理由について問い返すことで、より自己を見つめることができるのではないか。
- おばさんの表情の変化に着目して、せいこさんの胸の中がすうっとした理由を考える展開も考えられる。

(4) 研究の成果と課題

- 低学年の道徳科授業におけるICT機器の効果的な活用や、デジタルとアナログのベストミックスを意識した学習展開の工夫ができた。
- 葛藤場面での揺さぶりや価値に近づく発問の切り返しが十分ではなかった。児童の考えをさらに深めるためには、切り返しを効果的にすることが大切であると感じたため、揺さぶりの場면을大切にして研究を深めていきたい。

新居浜支部

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究の歩み

(I) 道徳主任会(4月)

ア 役員選出、研究主題の決定、年間研修計画の作成、その他の研修計画

イ 情報交換

3 研究の内容

(I) 研究授業 6月24日(火) 授業者 第1学年 新居浜市立西中学校 教諭 矢野 健太郎

ア 主題名 誠実な生き方【A 自主、自立、自由と責任】

イ 教材名 裏庭でのできごと(「中学道徳1 とびだそう未来へ」教育出版)

ウ ねらい 自分の失敗を正直に報告できなかった健二の葛藤について考えることを通して、誠実に行動することの良さや難しさについて考えを深め、責任ある行動をとろうとする実践意欲と態度を育てる。

エ 準備物 教科書、タブレット端末(Chrome Book)

オ 展開

学習活動	時間 (分)	主な発問と予想される生徒の反応	●留意点 ◇評価(方法)
1 誠実さについて考える。	4	○ 誠実さとは何だろう。 ・悪いことをしたらきちんと謝ること。 ・約束したことを守ること。 ・嘘をつかないこと。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 誠実に行動するという事はどういうことだろう。 </div>		○ 健二と雄一、大輔の行動をまとめる。 ・雄一はひなを助けようとした結果1枚目のガラスを割った。 ・健二は雄一が先生を呼びに行っている間に大輔と遊んで2枚目のガラスを割った。 ・大輔は先生に説明するときに健二の割ったガラスのことを隠した。	● 範読後、教材について全体で確認しながら物語の内容を整理する。
3 誠実に行動するという事は どういうことか考える。 (個人) ↓ (班) ↓ (一斉)	22	◎ もし自分が健二なら、どういう行動をとるだろうか。 <正直に謝る> ・後で遊んでいてガラスが割れたことが知られると怒られるから。 ・謝らなかつたらすっきりしない。 <謝らない> ・遊んでいたことが知られると怒られるから。 ・先生に言わなかつた雄一のことを裏切ることになるから。	● 最終的にとる行動だけではなく、理由や考えた本音を共有できるように机間支援を行う。

4 誠実であるということはどういうことか考えをまとめる。	8	<ul style="list-style-type: none"> ○ サッカー部の練習が終わった後も、健二の気が重かったのは、なぜだろう。 ・正直に謝りたかったが、そうできなかったから。 ・本当のことを言うと大輔との関係が悪くなると思ったから。 	
	6	<ul style="list-style-type: none"> ○ どうすれば誠実に生きていくことができるだろうか。 ・自分の行動に責任を持つ。 ・友達の意見に左右されることなく自分の意思を強く持つ。 	◇ 今までの自分を振り返り、これからの誠実な生き方を考えることができたか。(記述)

(2) 研究協議

- 心情メーターや番号が書かれた磁石を用いて、様々な生徒に意見を言ってもらっていたのが斬新な手法だと感じた。
- 落ち着いた授業の雰囲気づくりができており、どの意見も受け入れられているところが良かった。
- 心情メーターを用いて話し合わせる際、「謝る」を選んだ生徒同士でも、「謝る」に振り切っていない理由を話し合わせることで、多様な意見が出て議論が活性化したのではないか。生徒の様子を見ていると、何について話すべきなのか迷いが見られた。
- 導入の「誠実さとは何だろう」について、その時間で追究する道徳的価値について問うのも良いが生徒が「どういうことだろう?」と思うような動機付けの視点も大切にしたい。

(3) 指導助言

『裏庭のできごと』の指導書には、役割演技をすることを通して、道徳的価値を自分事として考えられると書かれている。一つの案として検討してみたい。また、登場人物のせりふが、「なぜそうなったのか」について考えることを通して、生徒たちの価値観の更新につながることもある。指導者が結論を出しただけでは、価値について深まらず、ひいては実践意欲にもつながらない。登場人物の行動・せりふや子どもたちの意見(子どもたち同士の話し合いでも、根拠を述べさせることで、違いを意識することができ議論が深まっていく)に対する「なぜ」という根拠を問うことで、道徳的価値が生徒の中で深まったり、新しい価値が創出されたりする。そして、そのためには日頃から話し合いの訓練をさせておくことが重要である。あこがれでは行動に結び付かない。意欲につながるような発問を目指してほしい。

4 研究の成果と課題

- 朝の会で、生徒が話す機会を設けるために、構成的グループエンカウンターを実施しており、違う小学校から来た生徒同士でも徐々に話し合いができる状態で授業に臨むことができた。
- 話し合うことはできても、その後に意見を言うことができない生徒が多い。そこは教員のサポートによって、意見を表出することができるように一段階引き上げる必要があるのではないか。

中学校部会

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳教育の研究

- (1) 計画的、発展的で特色ある道徳教育の推進
- (2) 要となる道徳科の充実

2 研究のあゆみ

- (1) 第1回道徳主任会(5月2日)
役員の選出、本年度の努力目標の確認及び研修計画の立案
- (2) 第2回道徳主任会
県外研修の報告(「役割演技」の手法について)
松山市教育研究大会2年次研修の授業展開例についての話し合い
→各校で授業実践→会場校にフィードバック
- (3) 松山市教育研究大会2年次研修(11月10日)
勝山中学校で研究授業実施
- (4) 特別支援学級における授業実践研修および道徳科についての講話(11月21日)
勝山中学校で近隣校及び3年次研究校など参加
- (5) 第3回道徳主任会(2月10日)

3 研究の内容

- (1) 授業実践(松山市教育研究大会2年次研修)第1学年 松山市立勝山中学校 教諭 小野亜紀

- ア 主題名 学校や社会の一員として【B 社会参画、公共の精神】
- イ 教材名 選ぶということ(「中学道徳I とびだそう未来へ」教育出版)
- ウ ねらい 社会に関わる意義の理解の下に、社会をよりよくするために積極的に関わり、社会を自分たちがつくっていかうとする意欲や態度を育てる。

エ 展 開

学習活動	時間 (分)	主な発問と予想される生徒の反応	・指導上の留意点 ◇評価
1 先日行われた自校の生徒会役員選挙を振り返る。 (一斉)	3	○ 生徒会役員選挙の立ち会い演説会で、立候補者の意見を聞いてどのように感じたか。	・事前アンケートの結果をテキストマイニングで提示し、学校内での選挙を想起させることで、本時の学習への関心を高め、問題意識を持たせる。
学校や社会をよりよくしていくために大切なことは何だろう。			
2 教材を読んで考える。 (1) 演説を聞いた愛梨さんの気持ちを考える。	15	○ 3人の演説を聞いて、愛梨さんは、なぜ「どうしよう……。」と思ったのだろう。	・感想や小さな疑問を持つことで、主体的に選ぶ態度につながせる。

<p>(2) 愛梨さんの行動について考える。 (個人→全体)</p>	17	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3人がいろいろ考えていて、智美以外の人々の演説内容が気になったから。 ・ 3人の演説を真剣に聞いていて、迷いが出てきたから。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <p>◎ 愛梨さんが、思いきって手を挙げてどのようなことを言うだろう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校の生徒会活動で実現できることは今の演説の中にありますか。 ・ 何を基準に代表を選べばいいですか。 ・ 3人の演説を聞いて、とても迷っています。もっと詳しく聞いてみたいです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんな候補者かだけでなく、演説の内容に注目することが大切であることに気付かせ、葛藤している主人公の気持ちに気付かせる。 ・ ロールプレイングを用いて、自分事としてとらえさせる。 ・ 主人公の行動の意味を考えることで、自分自身のこれからの態度につなげさせる。 ・ 投票の仕方について批判的な方向にならないように留意する。
<p>3 本時で学んだことを振り返る。 (個人→全体)</p>	15	<p>○ 学校や社会をよりよくしていくために大切なことは何だろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の一票が学校をよりよくすることにつながることを自覚したい。 ・ 自分も学校の一員であることを意識して参加したい。 ・ 選挙のときには演説をしっかりと聞いて選びたい。 ・ 自分たちの社会に積極的に関わっていききたい。 	<p>◇ 集団の一員として、自分自身のこれからの生き方と結び付けて考えられているか。 (ワークシート)</p>

4 成果と課題

- 第2回主任会で練り直した指導案だったが、実際に授業を実施したことで、生徒の反応や思考に結び付ける発問の工夫がさらに必要であると気付くことができた。
- 「特別支援学級における授業実践研修および道徳科についての講話」では、坂井親治先生と小島啓明先生から、私たちが必要とされる道徳科を深めるためのスキルを学ぶことができた。令和10年度全日本中学校道徳教育研究大会(愛媛県開催)に向けて、正しい道徳教育の共通理解を推進していきたい。

1 研究主題(小・中共通)

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究
 - 学びがいのある道徳科の授業を要として -

2 研究のあゆみ(令和4年度より、心の教育専門委員会としても活動)

- (1) 第1回道徳班会(4月23日)
- (2) 第2回道徳班会(6月24日)
- (3) 第3回道徳班会 <部会別で実施>(7・8月)
- (4) 第4回道徳班会 <大洲市一斉班会>(10月8日)

3 研究の内容

(1) 授業実践 10月8日(水)授業者 第5学年 大洲市立喜多小学校 教諭 森岡 佳菜恵

- ア 主題名 親切な心で【B 親切、思いやり】
- イ 教材名 くずれ落ちた だんボール箱(「新編 新しい道徳5」東京書籍)
- ウ ねらい 思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしようとする態度を育てる。
- エ 準備物 教科書、ワークシート、挿絵、タブレット端末
- オ 展開

学習活動	○主な発問(◎中心発問) ・予想される児童の反応	○指導上の留意点 ● 評価[評価方法]	3 教材の後半を聞き、話し合う。	○「わたし」の足取りがいつもより軽かったのはどのような気持ちの変化があったからでしょう。 ・お店の人に注意されてもやもやしていたけど褒められてうれしい。 ・誤解が解けて良かった。 ・やっぱりおばあさんを手伝ってよかった。 ・怒られて少し後悔していたけど、やっぱり親切にするのはとてもいいことだと分かった。	○ 親切な行為を人から認められたときの素直な気持ちや思いを押さえる。
1 「親切」について想起する。	○ 親切にしようと思っても、できなかった経験はありますか。 ・知らない人だったから行動できなかった。 ・時間に遅れてしまうからできなかった。 ・できるときと、できないときがある。 ・どうやったら親切にできるのかな。	○ 具体的な場面を想起させることで自分のこととして考えようとする意識を高めるとともに、本時の学習課題につなげる。			
親切を増やすために大切なことについて考えよう。					
2 教材の前半を聞き、話し合う。	○ 「いいえ、いいんです……。」と言って立ち去るとき、わたしはどんな言葉をおばあさんに掛けたでしょう。 <掛けた言葉> ・役に立てて良かったです。 ・男の子が迷子にならなくて良かったです。 ・片づけたことを注意されてしまいました。 <気持ち> ・おばあさんが困っていたから助けていただけなのに。 ・悪いことはしていないのに、なんで怒られないといけないんだ。 ・お店の人に怒られて恥ずかしい。 ・こんなことなら、助けなければよかった。 ・おばあさんが喜んでくれたから、やってよかったのかな。	○ 挿絵や関係図を用いて、登場人物の状況や心情を確認する。 ○ 範読せず、一文を提示することで、人物の心情を考えさせる。 ○ 補助発問や問い返しを通して様々な角度から言葉を考えさせることで、主人公の複雑な心情を捉えさせる。	◎ もし、同じ状況だったら、あなたはどうしますか。 ・怒られるかもしれないと思うと、できないかも。 ・やっぱり迷うかもしれない。 ・相手のことを考えて良いことをしたことには変わりはないからできると思う。 ・自分が怒られようと、相手のために行動したいな。	○ 自分事として考えたことを視覚的に共有できるようにすることで、様々な視点で議論が活発になるようにする。	
4 学習を振り返る。			○ 親切を増やすのに大切にしていききたいことはどんなことですか。 ・だれに対してもすること。 ・だれかに認められなくても、相手(困っている人)の立場になって親切にすること。 ・相手のためになっているかを考えること。	○ ワークシートに記入し、本時の学習を通して、親切に対する自分の考えを深める。 ● 相手の立場に立ち、相手のことを思いやって行動することの大切さを考えている。[記述・発言]	

(2) 研究協議

- 子どもたちは、本音でしっかり発表でき良かった。実行するためには、勇気がいるなど、葛藤している意見も良かったと思う。友達との意見交換によって、変容があった子どものネームプレートを動かすなどして、変容が見られるようにすると良かった。
- たくさんの子どもたちが、自分の意見をしっかり言えており、普通の学級経営にすばらしさを感じた。
- 教材には、主人公が変容している場面はなかったが、導入時の児童のアンケート結果と授業時の座標軸を比較すると児童の変容が見られたので、中心発問の時、導入時のアンケート結果も振り返るなどして変容したことに気付かせる方法もあったと思う。
- 「相手の立場に立って優しく接すること」のねらいは達成できていた。
- 「見返りを期待することなく、相手を思う気持ちから進んで行動する」のねらいを達成するためには、資料を分けた前半部分「親切にしたけれど怒られた」場面で、自分だったらこの状況で親切にするかどうか考えさせておくと良かったと思う。その上で、後半部分を読み、親切な行動を見てくれる人がいる、相手を思う気持ちで行動することが大切につながるのではないかなと思う。
- 「いいえ、いいんです・・・。」の「・・・」の部分が葛藤場面ではなく、親切な行動を理解してもらえなくて注意された場面が葛藤場面だったのではないかなと思う。
- ロールプレイを取り入れたら、より本音が出せたと思う。
- 子どもの意見の中に、子ども同士ならできるが、親がいたら、「ほっときなさい」などと言われて親切な行動に移せないのではという意見が聞かれた。学校での授業の限界を感じた。
- 「親切を増やすために大切なことについて考えよう」のめあてが、授業の終末に振り返られていて良かった。
- 振り返りを協働学習支援ツールなど活用できれば、みんなで共有できると思った。
- 座席配置がコの字になっており、話し合いがしやすい形態になっていたのが良かった。



資料1 授業の様子

(3) 指導助言

- 導入時に児童のアンケートを取り入れ、自分事として考えられるようにしていた。
- 主体的に話し合える授業形態が良い。ペアやグループでの話し合いなど、とてもやりやすい形態になっていた。
- 問い返しによる本音の引き出しができていた。
- 対話時間が確保しており、友達の意見と比較したり、共感したりできていた。
- ICTを活用して、視覚化する工夫がされていた。
- 子どもたちと向き合い、意見を大切にしていた。
- 挿絵や座標軸などを取り入れ、板書の工夫がされていた。
- 今後、道徳教育アーカイブの視聴をしたり、リレー道徳を取り入れたたりして、研修を深めてもらいたい。



資料2 板書の工夫

(4) 研究の成果と課題

- ネームプレートを活用し、考えを視覚的に共有することで、議論を活発にすることができた。
- 子どもたちの変容を気付かせるため、振り返りを協働学習支援ツールなどを効果的に活用できるよう、更に研究を深める。

1 研究主題

よりよく生きるための基盤となる道徳性が育つ道徳教育の研究

－ 学びがいのある道徳科の授業を要として －

2 研究のあゆみ

- (1) 喜多郡小・中学校道徳委員会(4月18日)
- (2) 喜多郡小・中学校道徳委員会 指導案審議(8月26日)
- (3) 喜多郡道徳部会研修会(10月17日)

ア 授業研究

イ 齊藤 照夫 先生による指導助言

3 研究の内容

- (1) 研究授業 授業者 第2学年 内子町立内子中学校 教諭 村田 潤

ア 主題名 自分自身に誇れる生き方とは【D よりよく生きる喜び】

イ 教材名 本当の私(「新編 新しい道徳2」東京書籍)

ウ ねらい ドーピングを告白した「エイミー」、「周りの人々」、「自分」のそれぞれの思いを考えることを通して、自分の弱さを乗り越える強さに気づき、自分自身に誇れる生き方をしていこうとする道徳的実践意欲を育てる。

エ 準備物 ワークシート、挿絵、電子黒板

オ 展開

学習活動	○主な発問 ・予想される生徒の反応	○指導上の留意点 (◎評価)
1 身近で起こりうる場面から、いろいろな面を持つ人間の姿を考え、本時のめあてを共有する。	<p>○ あなたに弱さがありますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ある ・ ない <p>○ あなたが自分の弱さだと思うところは、どんなところですか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 宿題をしないといけないのにスマホを触ってしまった。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;">自分自身に誇れる生き方について考えよう。</div>	<p>○ 自分の弱さについて振り返らせ、本時のねらいとする価値への方向付けを行う。</p> <p>○ 事前にアンケートをとっておき、掲示する。</p>
2 教材を基に考え、話し合う。	<p>◎ ドーピングを告白したエイミー、それを知った周りの人々、あなたはそれぞれどんなことを考えているでしょう。</p> <p>〈エイミー〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 正直に告白できて気持ちがすっきりした。 ・ 周りから非難されそうで怖い。 <p>〈周りの人々〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 裏切られた。 ・ またがんばってほしい。 <p>〈あなた〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分だったら正直に言えない。 ・ 正直に告白していてすごい。 	<p>○ 教材は、事前に読ませておくことで、場面把握の時間を短縮する。</p> <p>○ 「エイミー」「周りの人々」「あなた」の立場から考えさせる。(ワークシート)</p> <p>○ まずは、一人で考えさせ、その後グループで意見交換させた後、最後に全体で意見交流をすることで、多面的、多角的に考えさせる。</p>

<p>3 自己を見つめる。</p>	<p>○ 自分自身に誇れる生き方とは、どのような生き方でしょう。 ・弱さを受け入れる。 ・自分に正直になる。</p> <p>○ 今までの生活を振り返り、そのような思いをもって何かしようとしたことや、何かしたいと思ったことはありますか。 ・部活中に疲れて休みたいと思ったけれど、試合で勝つために友達と声を掛け合って練習をした。</p>	<p>○ 様々な考えや思いの中で、自分たちの気持ちを表すのに、最もぴったりのものを話し合いにより生徒の言葉でまとめさせ、価値理解を深めさせる。</p> <p>○ 自分の考えに合う納得解を見付けさせ、自分事として考えさせる。</p> <p>○ 自分自身に誇れる生き方をしていた自分に気付かせる。</p> <p>○ 称賛することで自尊感情を高め、実践意欲につなげていく。</p>
<p>4 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 学習して、心に残ったこと、感じたことを発表しましょう。 ・くじけそうになっても、エイミーのように自分に正直に弱さを乗り越えたい。</p>	<p>◎ 自分の弱さとそれを乗り越える強さについて、多様な考えに触れることで、自分との関わりの中で考えることができたか。 (ワークシート・発表)</p>

〈研究の視点〉

- 発問や学習活動、問い返しは、自分との関わりの中で考えを深めることにおいて、有効であったか。
- 小グループや全体の話し合い活動は、多面的・多角的に考えを深めることにおいて、有効であったか。

(2) 研究協議

- Yチャートは多様な意見を引き出す効果的な手段である。三者の中に「陸上関係者」を入れることで、主人公への共感を促すことができたのではないか。
- Yチャートを板書する際に、グループごとに意見をまとめたホワイトボードを直接黒板に貼るか、協働学習支援ツールを活用することで時間を短縮することができたのではないか。
- 主題に迫るために、問い返しを通して経験値を引き出せると良かった。

(3) 指導助言(齊藤 照夫 先生)

- 道徳科授業とは、「多様な価値観に触れる場」、「自己を見つめる場」である。
- ねらいの中に、「価値理解」、「自己理解」、「道徳性の育ち」の三点を入れる。
- 小学校と中学校の違いは、「自己」から「人間としての生き方」まで視野を広げることである。

4 研究の成果と今後の課題

令和5年度・6年度愛媛県教育委員会指定「愛媛県特色ある道徳教育推進事業」の天神小学校における取組を、中学校で活用する方法を模索するため、今年度は中学校で授業研究を行った。指導案審議に小学校の教諭も参加することで、授業に対する共通理解を図ることに努めた。また、齊藤先生の指導を受け、小学校と中学校の違いを踏まえた道徳科の基礎・基本の授業作りの方法を知ることができた。

課題としては、町内は小規模校が多く、少人数のクラスであるため、多面的・多角的な考えに触れにくいことである。少人数でも、多面的・多角的な考えを引き出す工夫を考えていく必要がある。また、授業において高められた道徳性が、実践につながらないことがある。道徳的価値を自分との関わりで捉えることができるよう、授業改善をしていく必要がある。

1 研究主題

よりよい生き方を探究する子どもの育成

2 研究のあゆみ

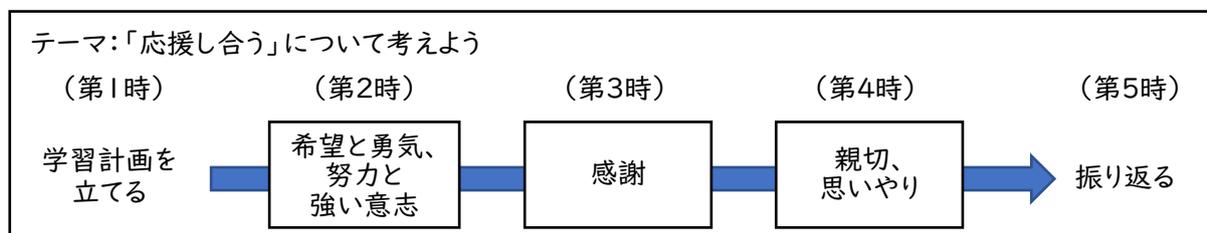
道徳部会(適宜実施)

3 研究の内容(愛媛大学教育学部附属小学校 第4学年 指導者 辻 健一)

附属小学校では、令和4年度から令和6年度の間、「子どもが創る『探究的な学び』をデザインする」という主題の下、研究を進めてきた。道徳部では、「なりたい自分」になろうとする生き方がよりよい生き方につながると考え、一つのテーマについて複数単位時間で考えるユニット単元を設定したり、中心発問の在り方について見直したりすることで、よりよい生き方を探究する子どもの育成を目指した実践を重ねてきた。ここでは、令和6年度2学期に実践した事例を紹介する。

(1) ユニット単元

本実践では、本学級の学級目標の一つである「応援し合い」について、中心となるいくつかの内容項目を組み合わせ複数時間のユニットを組んだ。また、その前後に学習計画を立てたり、学習を振り返ったりする時間を1時間ずつ設定し、計5時間のユニットとした(資料1)。



資料1 「応援し合う」をテーマとしたユニット単元学習計画

(2) 問いづくり

道徳科の授業の要である中心発問の代わりに問いづくりを行った。これは、教材を読んだ感想を基に、みんなで考えたい問いを子どもと共につくる活動である。そうすることで、自分事化された学びになり、より一層「子どもが創る」が実現されると考えた。

(3) 授業の実際(第4時)

ア 主題名 本当の親切・本当の応援【B 親切、思いやり】

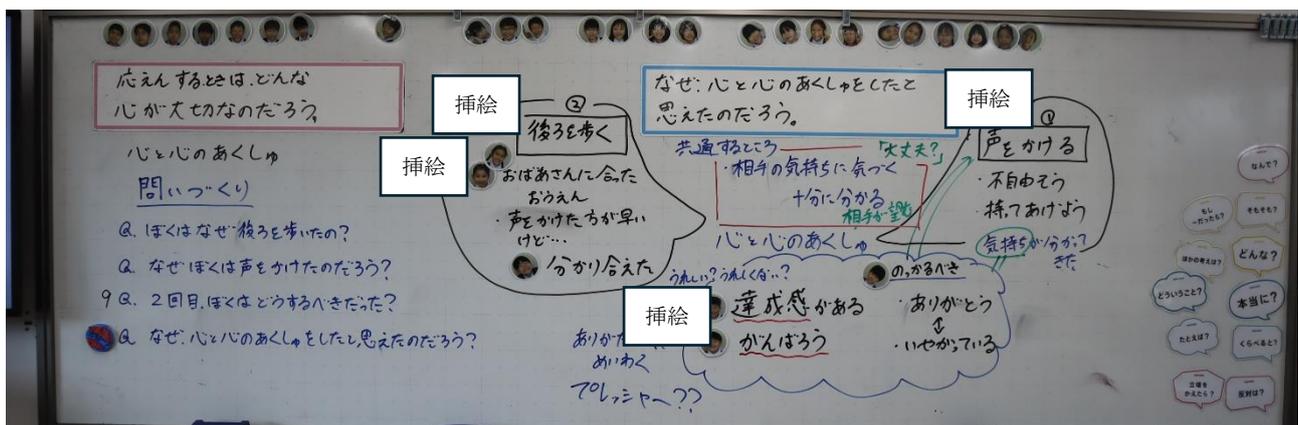
イ 教材名 心と心のあくしゅ(「小学道徳4 はばたこう明日へ」教育出版)

ウ 目標 足が不自由なおばあさんに対する主人公の行動や思いについて考えるを通して、相手の気持ちを自分のことのように考え、進んで親切にする道徳的心情を育てる。

エ 展開

学習活動	予想される子どもの意識の流れ	指導(○)と評価(●)
1 本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱の授業は「応援し合う」ができていたな。 ・諦めずに努力する人は応援したくなる。 ・感謝してくれる人も応援したくなる。 ・声で応援する以外はないのかな。 ・応援するときはどんな心が大切なのかな。 	○ 友達を応援している動画を視聴したり、前時までの学習を想起したりすることで本時のねらいに対する方向付けをする。
2 教材を読んで、問いづくりをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあさんが無事でよかった。 ・心と心の握手ができてよかった。 ○ぼくはなぜ後ろを歩いたのだろうか? ○なぜぼくは声を掛けたのだろうか? ○2回目、ぼくはどうするべきだったのだろうか? ◎なぜ心と心の握手をしたと思えたのだろうか? 	○ 自分事の問題を持つことができるように、教材を読んだ感想を基にして問いの形に変えていく。また、みんなで考えたい問いの選択肢をつくり、選ぶことができるようにする。

<p>3 つくった問いについて話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張ったねという気持ちで握手をした。 ・おばあさんに合った応援ができたと思ったから。 ・お互いに達成感があったから。 ・1回目(声を掛けたとき)はおばあさんと気持ちの分かり合えなかったけど、2回目(後ろを歩いたとき)は気持ちが分かり合えたから。 <p>「声を掛ける」と「後ろを歩く」に共通するところはどんなところだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どちらも応援している。 ・その応援が相手にとって、必要なものなのかどうか大事だと思う。 ・応援はプレッシャーにもパワーにもなる。 ・相手の気持ちに気付いたり、相手の気持ちを十分に分かったりすることも大事だと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「相手の気持ちを考えて」という動機に注目したり、多面的・多角的に考えたりすることができるように、必要に応じて問い返し発問をする。 ○ 道徳的価値についての理解を深めることができるように、子どもの声を構造的に板書する。
<p>4 本時の活動を振り返る。</p>	<p>これからの自分の生活に生かせそうなことを考えながら、授業の振り返りを書こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・応援することは好きだけど、これまでは自分がしたい応援をしていたときがあったかもしれない。 ・これからは、相手の気持ちを考え、相手にとって必要な応援をしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「なりたい自分」を再構築できるように、単元を通した振り返りの視点を提示する。 ● 相手の気持ちを自分のことのように考え、進んで親切にする道徳的心情を持つことができたか。【道徳ノート】



4 研究の成果(○)と課題(●)

- ユニット単元にすることで、「相手が一生懸命に努力しているからこそ、その人の力になれる応援をしたい」など複数の内容項目を関連付けながらテーマについて考えることができた。
- 教材を読んですぐに問いをつくるのが難しい場合には、まずは心が動いた場面やその理由などを挙げ、そこから問いにしていくようにした。そうすることで、子どもたちは道徳科の授業における問いをつくる過程を理解していった。
- 問いづくりの経験を重ねることで、子どもたちが自ら探究的な学びの軸となる問いをつくることができ、自分事として学習に臨むことでできた。
- 子どもたちがつくる問いの質を上げるためには、良質な問いに触れる経験が大切である。年間を通じて、教師が中心発問を行う授業の形から少しずつ子どもが問いをつくる授業の形へ移行していくようにするといいいのではないだろうか。
- 本実践では、問いを一つに絞る際、主に多数決の方法をとった。しかし、意見が分かれ僅差になった場合の展開に課題が残った。とりあえず一番多いものから始めるという方法以外に、「どうしてその問いについて考えた方がいいと思うのか」といったことを中心として話し合う展開の授業も考えられる。そのためにも、教材研究を通して子どもたちの考えの見通しをしっかりと持つ必要がある。

おわりに

愛媛県教育研究協議会道德委員会

副委員長 友澤 美和(伊予市立由並小学校校長)

「社会がどんな状況になろうとも、教育の根幹である道德性を育むという使命はなくなることはない」これは、多くの方にご参加いただきました今年度の愛教研小・中学校道德教育研究大会にける特別講演講師、大平剛生先生のお言葉です。本委員会では各支部において、学びがいのある道德科授業の充実のために、具体的方策を明らかにしながら、「よりよく生きるための基盤となる道德性が育つ道德教育の研究」がなされており、まさに、教育の根幹に深く関わる研究を進めているということになります。

本冊子にも紹介されております実践報告からは、自分の心と向き合い、自分の経験を重ねながら語り合い、他者の思いに触れて心が揺れ動く中で、時には考えを変えたり深めたりしている子どもの姿が想像されます。道德科での学びは、すぐに成果として表れるものではありません。しかし、授業の中で生まれた小さな気づきや心の動きは、子どもたちの中で確かに残り、やがて日常のふとした場面で表れてくるものだと思います。誰かの気持ちを想像して行動できたとき、迷う場面で自分の心と向き合えたとき、友達の意見を尊重しようとしたとき、その背景には一時間一時間語り合い、それぞれに考え学んだ積み重ねがあります。道德科の授業とは、まさに子どもの内面の成長を静かに支える営みなのだと改めて感じさせられました。また、教師が子どもの言葉を丁寧に拾い、価値付け、つないでいく姿が、子どもたちの語りを豊かにしていました。こうした教師の温かく豊かな関わりにより、子どもが自分自身を肯定し、未来に希望を持つことができるようになるのだと思います。

これらの各実践について公開授業や研修会等に参加された方々、また、本冊子をご覧いただいた方々におかれましては、道德科の授業づくりにおける多くの学びと示唆を得ることができたのではないのでしょうか。この度ご多用の中、中心となって研究を進めてくださった皆様、原稿のご執筆、研究大会の記録のまとめを行ってくださった関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和10年度には、全日本中学校道德教育研究大会(全国大会)が本県で開催されます。皆様の誇れる研究の成果が広まりますよう、また、更に研究を深めていけますよう、これからも、子どもたちの未来のために、そして子どもたちが自分らしく生きていく力を育むために、共に学び続けていきましょう。

令和7年度 愛媛県教育研究協議会 道徳委員会役員

	氏名	勤務校		氏名	勤務校
委員長	山岡 健二	垣生小	研究部長	石崎 有一	港南中
副委員長	木村 良太	白浜小	研究部副部長	松崎 桂子	西中
副委員長	友澤 美和	由並小	研究部幹事	河野 若菜	白浜小
副委員長	中野 実	惣開小	研究部幹事	宮脇美智代	福音小
事務局長	野本 淳子	雄郡小	研究部幹事	渡部 陽子	北伊予小
事務副局長	森下 典明	正岡小	研究部幹事	井上 未来	愛媛大院
事務局長補佐	辻 健一	附属小	全国大会準備	森脇 和夫	勝山中
事務局会計	東倉 知美	たちばな小	全国大会準備	小島 啓明	鶴島小
運営部長	長田 博臣	小野小	全国大会準備	安部 琴代	勝山中
運営部副部長	大柳 美優	北条南中	全国大会準備	松本 恵美	清水小
運営部幹事	豊田 幸子	和気小	編集部長	有馬 知歩	坂本小
運営部幹事	大橋 周平	大久小	編集部副部長	河野 美穂	城川中
運営部幹事	高市 佳児	粟井小	編集部幹事	重川ゆり子	国安小

令和7年度 支部委員長

支部名	氏名	勤務校	支部名	氏名	勤務校
四国中央	大西 明子	妻鳥小	喜多	竹場 千紗	小田小
新居浜	氏家あゆみ	中萩中	八幡浜	菊池 まゆ	八幡浜中
西条	重川ゆり子	国安小	西宇和	堀内 和美	瀬戸中
今治・越智	川崎 順子	清水小	西予	青木 牧	大野ヶ原小
松山	安部 琴代	勝山中	宇和島	木村 美鈴	明倫小
東温	橋本由紀子	拝志小	北宇和	新城 茂美	松野東小
伊予	田淵 裕子	岡田小	南宇和	山本 景子	御荘中
上浮穴	土井内幸太	美川中	附属	辻 健一	附属小
大洲	薬師寺柱介	大洲小			

愛媛の道德教育

第50集

令和8年3月 発行

発行者 愛媛県教育研究協議会道德委員会 委員長 山岡 健二